

「梅のあゆみ」

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

お万（お梅の局） 三代將軍側室↓大奥大上臈

春日局 三代將軍乳母、大奥筆頭御年寄

孝子（本理院） 三代將軍正室・御台所

お楽（宝樹院） 春日局付部屋子↓三代將軍側室↓四代將軍生母

お玉（桂昌院） お万付部屋子↓三代將軍側室↓五代將軍生母

竹川 大奥御年寄↓大奥筆頭御年寄↓大奥上臈御年寄

鶴岡 お万付中臈↓大奥御年寄↓大奥筆頭御年寄

赤澤 大奥御客応答

矢島局 四代將軍乳母↓大奥御年寄↓大奥筆頭御年寄

近江局 大奥御年寄（四代將軍付）

顯子 四代將軍正室・御台所

姉小路 顯子付上臈御年寄

飛鳥井 顯子付上臈御年寄

信子 五代將軍正室・御台所

お伝 五代將軍側室

右衛門左 信子付上臈御年寄（大奥女中総支配）

豊原 筆頭上臈御年寄

清雲院 初代將軍側室

徳川家光 三代將軍

徳川家綱 お楽の子、四代將軍

徳川綱吉 お玉の子、五代將軍

大久保彦左衛門 幕閣

天海 僧侶

順庵 御典医

隆光 僧侶

松平信綱 老中筆頭

酒井忠清 老中↓大老

稲葉正則 老中
堀田正俊 老中

牧野成貞 五代將軍側用人
阿久里 成貞の妻

ナレーション

N 「正徳元年、西雪一七一年の晩秋、一人の老女が、八十八歳の天寿を全うし、彼岸に旅立っていった。名をお梅の局、元の名をお万と言う。伊勢国慶光院の院主であつたところを、時の三代将軍・徳川家光に見染められ、還俗のうえ、側室となった。家光の寵愛を一手に受けたお万が、側室となつて大奥へ上がったのは、寛永十六年、西暦一六三九年。この時、お万は十六歳であつた」

○江戸城・外観

○同・大奥・長局の廊下

女中たちが、ぞろぞろと歩いている。

N 「江戸城は、将軍が政を司る表、将軍が日常生法を送る中奥、そして将軍以外は男子禁制で将軍に仕える女たちが日常生活を送る大奥に別れている。まだ十六歳だったお万は、この大奥で生活を始めたばかりであ

った」

○同・同・御鈴廊下

両端に並んで座っている女中たち――
両先頭に側室・お万、筆頭御年寄・春日局。お万の後ろに御年寄・竹川、お万付中臈・鶴岡、以降お目見え以上の女中たち。春日局の後ろに御客応答・赤澤、以降お目見え以上の女中たち。

御鈴が鳴り響く。

家臣の声「上様、おな―り―」

一同、平伏していく。

御錠口の扉が開き、三代将軍・徳川家光が姿を現し、廊下を歩いていく。お万、春日局たちが、順に立ち上がって、家光の後ろに従っていく。

N「この時、大奥の頂点に君臨していたのは、家光の乳母である春日局であった。母同然のように、幼き頃から家光を育てあげてきた春日局にとって、お万はある意味では、

息子を奪った憎い女も同然であつた」

歩きながら、一瞬お方に冷たい視源を
送る春日局。

○同・同・お万の部屋

お万付部屋子・お玉が待っている。

足音が聞こえ、鶴岡やその他中臈を引
き連れたお方が戻ってくる。

お玉「お帰りなさいませ」

難しい顔で座るお万。

お玉「お万様……？」

鶴岡「お方様、如何なされました？」

お万「上様は、本当に私を見染めてくださつ
たのであろうか？」

鶴岡「何故、そう思われます？」

お万「先程の総触れにおいて、上様は私と一
度も目を合わせてくだされなかった。私は
何のために大奥に来たのであろうか」

鶴岡「他の女中もおります故、照れていらつ
しやるのではございませんか」

お玉「それに、春日様もいらつしやいますし」

鶴岡「お玉殿……」

お玉「鶴岡様もご存知ではございませぬか。

春日様にとって、上様は我が子も同然。お万様は、目の上のたんこぶなのでござい
ます」

お万「……」

鶴岡「お方様。お気になさることはござい
せん。今やお方様は、上様のご寵愛を受け
られる唯一のご側室。誰に遠慮がいりまし
よう」

お万「それは、そうかもしれぬが……」

と、赤澤が入ってくる。

赤澤「失礼致します。本日、上様のお渡りが
ございます」

鶴岡「赤澤様……」

赤澤「（微笑むと）上様自ら、所望なされま
してございます」

お玉「（目を輝かせて）お万様ッ……」

ようやく笑顔になるお万。

○同・同・茶室

茶を飲んでいる竹川——茶を立てている春日局。

竹川「結構なお手前にございました。時に、何故お万の方様を憎んでおられるのです」

手か止まる春日局。

竹川「上様にご側室をと、急かされていたのは、他の誰でもない、春日様あなた様ではございませぬか」

春日局「……」

竹川「御台所の孝子様が中丸にお引きこもりなされてよりこの方、お世継ぎご誕生のためには、ご側室を設けられ、お子をなすことは必定。そうでございましょう」

春日局「お万の方様のお父上は、朝廷の参議、六条有純卿。上様とお方様の仲が深まり、万が一のことにでもなれば、朝廷の公家衆が政に口を挟むことにもなりかねるであろう。それは、何としても止めねばならぬ」

竹川「では、お万の方様との間に、お子は：
…」

春日局「必ずや、避けねばならぬ」

憮然としている竹川。

○同・表・黒書院

家光が、幕閣・大久保彦左衛門と、僧
侶・天海と話している。

大久保「上様。ご個室となられたお万の方を
早速、本日の夜伽に選ばれた由、爺は嬉し
く思いますぞ」

家光「……」

天海「上様は、もはや天下人におわします。
將軍家のお血筋を絶やさぬように努めるの
も、大切なお役目にて」

家光「無論じゃ」

大久保「はて、それにしても、難しい顔をさ
れておられるご様子」

家光「春日は、お万のことが気にいらぬのじ
や」

天海「無理もござらん。お万の方様は、公家の出。もし上様との間にお子を設けられ、それが男児であれば、いささか両側なことになるであろう」

大久保「では、お子を設けぬ側室になられるということか？ それでは、御台様同様、お飾りではないか」

天海「局のことじゃ。自ら個室を選び、上様に差し出すことなど、目に見えておる」

家花「春日に何と言われようが、側室はお万一人じゃ。その方らも、そう心得よ」

思わず顔を見合わせる大久保と天海――
―険しい顔の家光。

○同・大奥・御寢所（夜）

布団の中で眠っているお万と家光。

お万、家光の寝顔を見つめている。

お万「上様……お慕いいたしております」

と、家光の顔に触れる。

控えの間で、安堵の笑みを浮かべてい

る鶴岡。

○同・同・千鳥の間（翌朝）

春日局と竹川に報告をしている鶴岡。

竹川「では、するするとお済みになったのじやな」

鶴岡「はい。上様もお万の方様も、仲睦まじいご様子にて」

竹川「それは重畳。のう、春日様」

春日局「どうであろうか」

鶴岡「……？」

春日局「ご個室については、私も品定めを行おうと思う」

鶴岡「春日様……」

竹川「お万の方様は、上様が自らお選びになったのです。春日様の選ばれたおなごを、上様が所望なさいますでしょうか」

春日局「それは私より上様にご進言いたす」

竹川「……」

鶴岡「……」

○同・同・お万の部屋

お万、鶴岡、お玉が話している。

お玉「上様に、ご側室をッ……」

お万「……」

鶴岡「春日様が、そのように仰せられて」

お玉「何故、春日様は新たにご側室を？」

鶴岡「それは……」

と、足音と衣擦れの音が聞こえ、竹川が入ってくる。

竹川「失礼いたします」

お万「竹川殿……」

鶴岡「竹川様、春日様の仰っていたこと、如何されるおつもりですか」

竹川「一度決められたことは、曲げぬお方じや」

お玉「あの……春日様は何故、上様に新たにご側室を……」

竹川「それは……」

お万「……」

竹川「春日様は、上様とお万の方様との間に
お子ができることを、拒んでおられます」

お万「何故ですか……」

竹川「お万の方様が、公家の出ゆえござい
ます」

お万「……」

お玉「それの何がいけないのでございますか」

竹川「お万の方様が男児をお産みになられ
ば、政に朝廷が口を挟んできましよう。春

日様は、それを危惧しておられるのです」

お玉「そのような理由で……」

竹川「お万の方様のお耳には入れておいたほ
うが良いと思い、竹川自ら、余計なことは
思いましたが、お伝えさせていただきま
した」

お万「……」

お玉「……」

鶴岡「……」

竹川「どうか、お氣を確かに」

激しく落胆しているお万。

○同・同・長局の一室

竹川と赤澤が、囲碁をしている。

赤澤「春日様が、そのようなことを……」

竹川「いくら上様や徳川家のためとは申せ、
まだご側室にもなつて間もないお万の方様
のお気持ちも察せられず、新たにご側室な
ど、何ともむごいことをなされる……」

赤澤「竹川様は、随分お万の方様の肩をお持ち
ちになられるのですね」

竹川「赤澤殿も、それは同じではございませ
ぬか」

赤澤「お万の方様は、上様が所望なされしお
方。仲睦まじいご様子は、人前ではなされ
ぬかもしれませぬが、昨日、お渡りがある
と聞かされた時のお万の方様、それはそれ
は嬉しそうでありました」

竹川「……」

赤澤「これでまた、新たなご個室がこの大奥
に参られるとあらば、お察し申すに余りあ

る」

竹川「御台様のようなことに、ならなければ
良いのじゃが……」

不安な顔の竹川。

○同・中の丸・孝子の部屋（数日後）

春日局とお万が待っている。

N「数日後、お万と春日局は、中の丸に引きこもっている御台所、孝子の元を訪れていた。孝子は、京の五摂家の一つ、鷹司家の娘で、父は前関白・鷹司信房である。孝子以降、御台所は京の摂家の姫、親王家の姫、皇女から迎えるのが慣例となり、これは後の十五代将軍・慶喜まで続くこととなった。また、正室である御台所と将軍の婚礼は、言わば攻略婚であり、この時の家光と孝子の夫婦仲は完全に冷え切った別居状態であった」

と、女中の声が聞こえてくる。

女中の声「御台様の、おなりにございます」

平伏するお万と春日局――襖が開き、

御台所・孝子がやってくる。

春日局「御台様には、ご機嫌麗しゅう……」

孝子「（遮って）麗しいことかあろうか……」

お万「……」

春日局「……」

孝子「（お万を見て）そなたが、お万殿か」

お万「はい……。お初にお目にかかります、

万と申します」

孝子「そなたの噂は、この中の丸にいても聞こえてまいる。尼から還俗させてまで側室にするなど、上様も春日殿も、人の心がないのであらうか」

春日局「恐れながら御台様。上様は、天下の將軍におわします。お世継ぎのためには、ご個室を設けていただくのも、大切なお役目にて」

孝子「じゃが、お万殿の父上は、朝廷の参議を務める六条殿と言うではないか。政においては、目障りではないのか」

春日局「これはまた、否なこと……」

孝子「上様のご寵愛をお受けになるのも、いつまでか。今に、私のように捨てられるであらう」

お万「御台様……」

孝子「この春日に目をつけられた以上、そなたはこの大奥で、抜け殻のような一生を過ごすであらう」

お万「……」

孝子「（皮肉に）何とまあ、おいたわしいことじゃ」

不服そうに孝子を睨む春日局。

黙ったままのお万。

○大久保彦左衛門の屋敷・全景

N「時を同じくして、神君家康より三代に渡って徳川家を支えた大久保彦左衛門が急な病に伏せ、家光はお忍びで、大久保の元を訪れていた」

○同・一室

大久保が寝込んでいる！家光が来ており、様子を見ている。

大久保「上様……このようなところに、おいでくださるとは……」

家光「爺、氣を確かに持つのじゃ」

大久保「もう、この老体では、上様をお支えすることはできません。老骨に打つ鞭も、もうございませぬ」

家光「何を言う……」

大久保「上様がこうして、私の屋敷に来てくださることが、何よりの誉に存じますぞ」

家光「……」

大久保「これでもう、思い残すことはございませぬ。安心して、あの世へ行けます」

家光「そのような戯言が言えるうちは、まだ迎えなど来ぬわ」

大久保「相変わらずの、そのお口ぶり。さすがは、家康公のお血を引く天下人でございませぬ」

家光「……」

大久保「家康公が築かれし、この幕府。決して、絶やしてはなりませんぞ。爺は、あの世から見守っております故……」

家光「爺……」

微笑んで頷く大久保。

N「その言葉が遺言であるかのように、大久保は間もなく息を引き取った。八十歳の老体の死は、実に安らかなものであった」

○江戸城・大奥、御寝所（夜）

お万と家光が話している。

お万「大久保様のこと、残念にございましたね」

家光「ああ。亡き祖父・家康公の頃より、仕えておってな」

お万「左様でございましたか」

家光「爺は、第二の祖父であった」

お万「……」

家光「父上も母上も亡くなり、爺もまた、わ

しの前からいなくなってしまったわ」

お万「……」

家光「お万、そなたはどこへも行かぬであらう」

と、お万の脳裏に、孝子の声が蘇る。

孝子の声「上様のご寵愛をお受けになるのもいつまでか。今に、私のように捨てられるであらう」

お万「……私は、ずっと上様のおそばにおりまする」

家光「お万……」

お万、家光を抱きしめる。

お万「私は、上様のために、この大奥へまいりました。これからもずっと、上様と共に生きとうございます」

家光「……」

そのまま体を横に倒すお万と家光。

○同・表・黒書院

家光が大老・土井利勝、老中・松平信

綱、その他家臣たちと対面している。

土井「上様、先年の島原の乱よりこの方、キリシタンの取り締まりを、一層厳しくいたさねばなりません」

家光「絵踏はどうであろうか、キリシタンでなければ、ためらうことなく踏めるであろう」

土井「それは名案と存じます」

家光「禁教を徹底させるためには、ポルトガルとの断交もせねばならぬ」

松平「あいや、しばらく。恐れながら、ポルトガル人がマカオよりもたらしめます生糸は、我が国の貿易においても欠かせぬものでございます。今、ポルトガルとの仲を絶つのは、如何なものかと存じます」

家光「それも一理ある。何か、策を考えねば」
 憮然としている家光。

N「大久保の死後、家光は以前にも増して、政と向き合うようになった。この年、オランダ商館長のフランソワ・カロンが、家光

に謁見した折、オランダの植民地である台湾を経由しても生糸の確保ができることが明らかになったことで、家光の頭を悩ませていたポルトガルとの断交は踏み切ることができたのである。が、家光の頭を悩ませていたもう一つの問題が、大奥では起こってしまっていた」

○同・大奥・廊下

お万が、鶴岡、お玉、その他女中たちを従えて歩いている。

お万、足を止めると、腹に激痛が走り、その場に倒れこむ。

鶴岡「お方様……？ 如何なされました？」

お玉「お万様ッ……？」

腹を押さえながら悶えているお万。

鶴岡「（女中たちに）早う、御匙をッ……」

女中たち「はいッ……（と去っていく）」

鶴岡「お方様……」

お玉「お万様……」

と、隅のほうで春日局が様子を伺っているのに気づくお玉。

お玉「……」

春日局、お玉の視線に気づくと、去っていく。

お玉「……」

やがて意識を失うお万。

○同・同・お万の部屋

お万が休んでいる——御典医・順庵が診立てをしている。

不安そうに見ている鶴岡、竹川、お玉。
と、赤澤が駆け込んでくる。

竹川「赤澤殿……」

赤澤「お万の方様のご様子は……？」

竹川「今、順庵殿が……」

順庵「恐れながら……」

一同「……？」

順庵「お方様は、もう、お子ができぬ体に……」

鶴岡「何と……」

お玉「……」

険しい顔で、顔を見合わせる竹川と赤澤。

○同・同・春日局の部屋

人影から報告を受ける春日局。

春日局「そうか、首尾良く進んだか」

○同・同・廊下／＼お万の部屋（夜）

鶴岡が通りかかる――お万の部屋から灯りが漏れていることに気がつく。

鶴岡、中の様子を伺うと、お万が懐剣を打煮ているのが見える――ハツとなり、駆け寄って、

鶴岡「お方様、なりませぬッ……」

お万「死なせてくだされ……」

と、懐剣を奪い合う――やがて、懐剣を払い捨てる鶴岡。

お万「……」

鶴岡「お方様……」

お万「こんな体になって、これからどうすれば良いのです」

鶴岡「……」

お万「私は、上様のお子をお産みしたかった。若君でも姫君でも良い。上様との愛の証が欲しかった。しかし……もはや、それも叶わぬ夢と散ってしまった……」

鶴岡「……」

お万「私は、何のためにこれから生きていけ
と言うのです……」

と、泣き崩れる――鶴岡、お万にただ
寄り添っている。その目にも涙が浮か
んでいる。

○同・同・廊下（数日後）

鶴岡が慣然と小走りで歩いている。

○同・同・千鳥の間

竹川が書類を見ている――足音と衣擦

れの音が聞こえ振り向くと、鶴岡が入ってくる。

鶴岡「失礼いたします」

竹川「鶴岡殿、いかがでした？」

鶴岡「春日様は、いずこへ？」

竹川「お出かけになられておる。近頃、上様のご御室を探すと申されて、幾度となく」

鶴岡「そのような……。お万の方様に、お子ができぬ毒を飲ませたのは、春日様ではございませんぬ」

竹川「……」

鶴岡「お方様がどれほど傷ついておられるか。上様のご龍愛をお受けになる御身でありながら、お子ができぬなど、これでは何のためのご個室でございましょうか。私は、春日様をお恨み申し上げます」

竹川「そなたの気持ちが分からぬわけでもないが、春日様がお万の方様に毒を飲ませたという証は、どこにもないのじゃ」

鶴岡「春日様以外に、考えられぬではござい

ませぬか」

竹川「……」

鶴岡「お方様は、しばらく朝の総触れにもお出にならぬと仰せられております」

竹川「左様か……」

鶴岡「上様とお顔を合わせるのが辛いと……私には、そのお方様の気持ちがよく分かります」

竹川「今更、時が戻るわけでもない。お辛いかもしれぬが、お万の方様はしばらくお休みになられたほうが良いであろう。春日様のご側室選びとて、もはや時間の問題であろう」

鶴岡「もしや、既に……」

竹川「市中でお探しになられておるが、もしこれといったおなごが見つからぬ場合は、部屋子の一人を、上様に差し出すおつもりらしい」

鶴岡「いずれにせよ、新たにご側室を差し出すのは、覚悟しておかねばならぬのですね」

竹川「……」

○同・同・お万の部屋

鶴岡が入ってこようとする——やつれたお万が、しくしくと泣いている。

お万の隣で、寄り添うように背中をさすっているお玉。

その様子を立ち尽くしたまま見ている鶴岡。

○同・同・春日局の部屋

女中たちに着付けをされている個室・お楽——微笑ましく見ている春日局。

N「春日局の目に止まり、五年ほど部屋子として務めていたお楽が、側室となることが決まったのは、それから間もなくのことであつた」

着付けを終えたお楽が、春日局の前に座る。

春日局「これならば、上様のお気に召すであ

ろう」

お楽「あの、春日様……」

春日局「何じゃ？」・

お楽「私のような者が、本当にお世継ぎなど産めるのでしょうか」

春日局「何を申されるか」

お楽「私は、元は農民の娘にございます。將軍家にとってもふさわしいとは……」

春日局「（遮って）案ずることはない。私とて、逆賊と呼ばれた明智光秀公の重臣を父に持つ、言わば罪人の娘じゃ」

お楽「……」

春日局「過ぎたことなど、気にすることではない。上様にお仕えする気持ちに嘘偽りさえなければ、それで良いのじゃ。お楽……いや、本日よりは、お楽の方様とお呼びせねばならぬな。ご側室として、くれぐれも励むように」

お楽「かしこまりました（と平伏する）」

○同・同・お万の部屋

お万、鶴岡、お玉が待っている――赤澤が入ってくる。

赤澤「失礼いたします。お呼びにございましたか？」

お万「赤澤殿。春日様が、お付きの部屋を上様のご側室にされたというのは、誠か？」

赤澤「はい。お楽の方様と申します」

お万「そのお楽殿が、上様のご寵愛を受けられれば、春日様の権勢もまた、揺るがぬものになるであろう」

赤澤「はあ……」

お万「私は、このまま春日様お一人が権勢を奮われるのを黙って見てはおけぬ。そこで私も、お付きの者を、ご個室として上様に差し出そうと思う」

赤澤「……？」

鶴岡「お方様……？」

お玉「……？」

お万「これなるお玉を、上様に……」

お玉「お万様……何を仰せられます」

鶴岡「何故そのような……」

お万「春日様に振り回され、むざむざと泣き寝入りしたくないからじゃ」

お玉「しかし……私が……」

お万「赤澤殿は、どう思われる？　上様が奥へおなりの際に接待の全てを仕切る御客応答であるそなたの考えも聞きたいのじゃ」

赤澤「確かに、春日様同様、お付きの部屋子をご側室にされれば、後見人としてお万の方様の権勢は向上するでしょう」

お万「では、お玉を……」

お玉「（遮って）お待ちくださいッ……」

お万「……」

お玉「私は嫌でございます……」

お万「お玉……」

お玉「私がご個室になるということは、お万様と争うことになります。上様を取り合う関係になど、なりとうはございませぬ……」

鶴岡「お万様。これでは、お玉があまりでは

ございませぬか……。私は反対でござい
ます」

お万「私は……、春日様に負けたくないのじ
ゃ。（とお玉に）私を助けると思いうて、側
室になってくれぬか」

お玉「……」

お万、お玉に駆け寄って頭を下げると、
お万「この通りじゃ、お玉……」

お玉、顔を伏せて泣き出す――ずっと
頭を下げているお万。

○同・同・長局の廊下

竹川と赤澤が話している。

竹川「お万の方様が、そのような……」

赤澤「春日様が、お楽の方様を差し出すとい
う話を耳にし、矢も楯もたまらぬご様子で
……」

竹川「お子のできぬ体にされたことを、お根
みしているのであろう。宿敵とも言える春
日様のなさりようを、お万の方様がお許し

になる道理かない」

赤澤「……」

竹川「春日様に、どのようにご報告いたせば
良いであろうか」

赤澤「正直に申し上げたほうが良いかと存じ
ます」

竹川「隠せばまた、事が大きくなってしま
うからの」

難しい顔の赤澤。

○同・同・御寢所（夜）

お楽が待っている——家光が入って
くると、平伏して迎える。

何もせず、じっとしたままの家光。

お楽「あの……上様」

家光「……？」

お楽「何も……なされぬのでございますか？」

家光「何故そのようなことを聞く？ 春日の

入れ知恵か？」

お楽「いえ、そのような……」

家光「務めを果たせば、春日も何も言うまい」

お楽「……」

家光、お楽を横に倒す。

お楽「……」

家光「……」

体を重ねていく家光とお楽。

○同・同・お万の部屋（夜）

布団で寝ているお万——なかなか寝付
けず、何度も寝返りを打っている。

○同場所（翌）

春日局とお万が向き合っている——両
者とも険しい顔で見合っている。

春日局「部屋子のお玉を、上様のご側室にと
いう旨、御客応答の赤澤から聞きました」

お万「左様にございますか」

春日局「どういう趣か、お聞かせいただきた
いと思ひまして」

お万「そのようなものございません」

春日局「……？」

お万「私はただ、春日様のなさりようを真似ただけのことです」

春日局「何と仰せられます」

お万「あなた様は、上様の御為に、ご自分の部屋子であるお楽殿を差し出されました。ならば私も、上様の御為にお玉を差し出したのです」

春日局「……」

お万「上様を思ってお気持ちは、春日様も私も同じでございます」

春日局「……」

お万「徳川の世のために、我らが今できることは、ご側室を上様に差し出すこと。共に手を取り合わなければなりません。私はあなた様によって、お子のできぬ体になりました。ならば今、私が上様にできることは、これしかないのです。あなた様のおかげで、新しい道が開けましてございます。御礼の言葉もございませぬ」

と、軽く頭を下げる――憤然と出ていく春日局。

襖が開き、隣の間からお玉が出てくると、

お玉「お万様……」

お万「あれぐらい言わねば、私の気が済まないだ……。お玉、詳してください……。私や上様のために、そなたに辛いお役目を……」

お玉「お万様のためならば、私は、夜伽にあらります」

お万「お玉……」

お玉「ずっと考えておりました……。私が上様のご側室になど、なれるわけがないと。しかし、お万様のためならば、私はこの身を差し出しても良いと、そう思うことといたしました」

お万「お玉……」

お玉「お万様……」

お万、お玉を優しく抱きしめる。

○同・同・廊下

荒々しく歩いている春日局。

○同・同・長局の一室（数日後）

竹川と赤澤が話している。

竹川「一昨日はお楽の方様、いよいよ今宵は

お玉殿か……」

赤澤「ある意味では、これがお万の方様の反
逆なのでございましょう」

竹川「反逆か……」

○同・同・御寝所（夜）

お玉が待っている——家光が入ってく
ると、平伏して迎える。

家光「お万の部屋子というのは、そなたか」

お玉「はい、お玉と申します」

家光「何故、夜伽にあがった？」

お玉「……お万様のためにございます」

家光「……」

お玉「私が夜伽にあがることで、お万様が救われるのであれば、私は何度でも……」

家光「もうそれ以上申すな」

お玉「……」

家光「これだけは言うておく。例え側室が増えようとも、わしが思うのはお万だけじゃ。かよう心得よ」

お玉「はい……」

家光「それでも構わぬと申すか」

お玉「全ては、お万様のためでございます故」

家光「おもしろいおなごじゃな」

微笑み返すお玉。

N「お玉の後見であるお万と、お楽の後見である春日局の関係性は、更に悪化の一途を辿っていた。それぞれ側室を差し出すことで、自身の権勢を大きくしようとするお万や春日局のことを、誰も止めることはできなかった。家光が、例えお万一人のことを思っているとしても、子ができない体となってしまうお万は、自身の権勢を奮うことしか

春日局には勝てないと思っていたのである。
お方はこの頃から、大奥の頂点に君臨する
野望を抱き始めたのである」

○同・同・春日局の部屋（三ヶ月後）

春日局が、煙管を吸っている。

N「そして、お玉が夜伽にあがった日から三
ヶ月が経ったある日……」

と、足音と衣擦れの音がし、竹川が駆
け込んでくる

竹川「春日様……、お楽の方様がお倒れに
なられました」

春日局「何と……」

○同・同・お楽の部屋

お楽が寝込んでいる——治療をしてい
る順庵。

不安そうに見守もる春日局と竹川。

順庵「ご懐妊にございます」

春日局「誠か……誠、ご懐妊か？」

順庵「はッ……」

春日局「お楽殿、丈夫な和子様を生むのですぞ」

お楽「はい……」

春日局「何としてもそのお子を、お世継きにせねば……」

竹川「……」

○同・同・お万の部屋

お万が花を活けている――側に控えている鶴岡。

お万「ご懐妊か……」

鶴岡「はい。春日様は、それはそれはたいそうなお喜びようで」

お万「若君か姫君かもまだ分からぬと言うのに、おめでたいお方じゃ」

荒々しく花の枝を切るお万。

○神社

お百度参りをしている春日局。

N 「お楽の懐妊に対する春日局の思い入れは激しく、まるで生まれてくる子どもが既に男児と分かっているかのように、抜かりない支度を整えていた」

○江戸城・大奥、対面の間

竹川と松平が女たちの面接をしている。

N 「春日局は、お楽の子の養育を務める乳母を採す支度を始めた、選定を行ったのは、御年寄の竹川と、老中の松平信綱。やがて、厳選なる人達を経て、一人の女が選ばれた」

○同、同・お楽の部屋（数ヶ月後）

臨月となり腹の膨れ上がったお楽が座っている――春日局が、乳母・矢島局を引き合わせている。

春日局 「これなるは、生まれてくるお子の乳母を務める矢島局にございます」

矢島局 「矢島にございます。生まれてくる和子様が、健やかにご成長あそばされるよう、

粉骨砕身務めさせていただきます」

お楽「私自ら、お乳をあげることもできぬのですか？」

春日局「生まれてくるお子は、將軍家のお子にごさります。乳母の手で、しっかりとご着育させていただきますれば、お楽の方様は産後のご静養を、ゆつくりとなされませ」

お楽「……」

矢島局「後のことは、この矢島に万事お任せくださいませ」

お楽「……」

○同・全景（数日後）

○同・大奥・お楽の部屋

中庭に出ているお楽が、呆然と座っている――鶴岡を従えたお万がやっている。

お万「お楽殿」

お楽、振り向く――目に浮が浮かんで

いる。

お万「如何されました？」

お楽「（慌てて涙を拭いて）いえ……」

お万「お体の具合は如何かとお見舞いに参上したのですが」

お楽「一昨日のことなのですが、春日様が矢島殿を連れてこられました……」

お万「矢島殿……？」

鶴岡「お楽の方様の和子様のお乳母を務めるために、新たに召しかかえられた者にごさいます」

お万「乳母……？」

お楽「ご養育だけならいざしらず、お乳も矢島殿が差し上げるとのこと」

お万「何と……」

鶴岡「……」

お楽「お乳もあげられぬなど、私は、一体何のためにこの子を産むのでしょうか……。これでは、私は上様のお子を産むための道具ではございませぬか」

お万「……」

お楽「この手でお乳をあげ、抱きかかえ、お育てしたかったのに……」

お万「……」

お楽「こんな子……産まないほうが良いのです」

お万「お楽殿……」

お楽「愛情も注げぬようなわが子です……。
いつその手で……」

お万「そのようなこと……」

お楽「望まれもせず生まれてくるような子
など、幸せにはなれませぬ」

お万「……」

お楽「どうか、私のことは放っておいてくだ
さいませ」

お万「お楽殿……」

お楽、立ち上がって室内に戻るが、突
然うなり声をあげて、その場に崩れ落
ちる。

お万「お楽殿……？」

と、駆け寄る——お楽が破水をしている。

お万「（絶句して）鶴岡、早う御典医様をッ

……」

鶴岡「はいッ……（と飛び出していく）」

お万「お楽殿……お氣を確かに」

脂汗をかいて悶絶しているお楽。

○同・同・一室

産婆たちに囲まれながら、いきんであるお楽。

○同・同・控えの間

不安そうに見守っている春日局、竹川、赤澤、矢島局。

○同・同・お万の部屋（夜）

落ち着かない構子で、右往左往しているお万——鶴岡、見守るようにお万を見ている。

と、お玉がやってくる。

お玉「お万様……」

お万「お玉……」

○同・同・一室

必死でいきんでいるお楽。

産婆「おいきみなされませ。もう少しでござ
いますよ」

○同・同・控えの間

見守っている春日局、竹川、赤澤、矢
島局。

と、赤ん坊の泣き声が響き渡る。

ハツとなる一同——産婆が出てくると、
産婆「元気な若君にございます」

春日局「お世継ぎじゃ……お世継ぎのご誕生
じゃッ……！」

○同・表・黒書院

じっと待っている家光、土井、天海、

その他家臣たち。

と、松平が入ってくる。

松平「申しあげます。お樂の方様におかれましては、ただ今、無事に若君をご出産のことにございます」

一同、歓喜の声がもれる。

家光「そうか。（と微笑むと）母体はどうじゃ？」

松平「母子ともに安泰のご様子にて」

家光「ならば良い」

土井「（改めて）上様、お世継ぎのご誕生、誠、おめでとう存じます」

一同、深々と平伏する。

家光「天海」

天海「はい」

家光「早速、和子の命名をそなたに考えてもらいたい」

天海「身に余る光栄、かしこまりましてございます」

大きく頷く家光。

○同・同・大広間（数日後）

土井、松平、その他家臣たちが平伏している――家光、春日局、天海、赤ん坊を抱いた矢島局がやってくる。

N「数日経ち、江戸城大広間において、お樂の産んだ子の対面の儀が執り行われた。が、そこに、実母であるお樂の姿はなかった」

家光たち、それぞれの位置に座る。

家光「世の嫡男の名前を、天海に決めてもらった。天海、名を申せ」

天海「ははあ」

と、“幼名竹千代”と書かれた紙を一同に見せる。

天海「お世継ぎ様のご幼名は、竹千代様にございます」

家光「その趣は？」

天海「これにおわします若君は、徳川に行く末を背負っていかれます。竹千代という名

は、上様や神君家康公の幼名にも用いられ
し、由緒正しく、縁起の良い名にございま
すれば」

家光「一同の者、竹千代じゃ。以後、心して
おくように」

一同「ははあッ……」

と、深々と平伏する。

春日局「竹千代君……良き名じゃ……（と感
極まる）」

矢島局「竹千代君、これから健やかにご成長
あそばされるよう、身命を賭してお仕えさ
せていただきますぞ」

と、竹千代に微笑みかける——ニコッ
と笑う竹千代

○同・大奥・お楽の部屋

呆然と座っているお楽——山のように
並べられた出産祝いの品を見つめて、
大きな溜息をつく。

○同・城内の庭

お万と家光が、橋の上に立っている――

――池の鯉を眺めている家光。

お万「お楽殿のお産みになったお子、竹千代君と命名されたそうですね。上様と同じ御幼名の」

家光「ああ。竹千代は、わしの世継ぎじゃ。

將軍家の血を引く、大事な跡取り故、天海が名付けてくれたのじゃ」

お万「將軍家の血を引く……」

家光「……」

お万「上様、この頃、春日様に似てまいりましたね」

家光「……」

お万「……これは、失礼なことを申しました」

家光「（苦笑して）構わぬ」

お万「……」

家光「無理もない。わしは、春日の手に寄つて育てられた。実の母の愛を、わしは受けたことがなかった」

お万「……」

家光「母は、弟の忠長を將軍にしたいと思うておった。じゃが、春日はわしを將軍にするために、駿府に出向き、祖父である家康公に直訴したのじゃ。あの頃、將軍職は父の秀忠であつたか、実権はまた家康公が握つてて、父はお飾りの將軍だったのじゃ。あの頃、家康公は政権は徳川のものであるということ、世に広めたかったのじゃ。それ故に、父に將軍を譲っただけのこと」

お万「先代秀忠公も、神君家康公の思うがままにされ、お可哀想なお方だったのですね」

家光「そんな父上を見て、わしは、父の言いなりになるような將軍にはならぬと決めたのじゃ。自分の思い通りにならぬなど、これでは何のための將軍か分からぬであろう」

お万「……」

家光「春日のおかげで、わしは將軍になれた。將軍になるためには、陰で支える乳母の存在が不可欠なのじゃ」

お万「そのためならば、母の愛情はなくても
良いと思われるのですか？」

家光「……？」

お万「竹千代君は、お楽殿というお母上がい
なから、このままでは実の母の愛情を知ら
ずにご成長されるでしょう」

家光「……」

お万「ご出産の日から、お楽殿はすっかり元
気をなくされてしまわれました。お腹を痛
めて産んだ我が子をこの手に抱けず、愛情
を注ぎたくても注げないなど、これほど惨
い仕打ちがございましたか」

家光「……」

お万「上様ならば、お楽殿のお気持ち分か
りましょう。わが子である竹千代君にも、
同じ辛さを味合わせて平気なのでございま
すか？」

家光「……」

お万「上様……」

懽然としている家光。

○同・大奥・竹千代の部屋

竹千代を寝かしつけている矢島局――
竹千代の寝顔を確認すると、静かに襖
を閉じる。

控えの間で待っているお万――向き合
うように座る矢島局。

矢島局「竹千代君を、お楽の方様に？」

お万「はい」

矢島局「竹千代君は、將軍家のお子にござり
ます。お方様お一人の子ではございませぬ。
それに、ご側室のお一人にすぎぬお万の方
様が、何故そのような差しでがましいお振
る舞いをなされるのです」

お万「私の振る舞いではございません。これ
は、上様がお決めになられたこと」

矢島局「上様の……」

お万「お断りなされるおつもりですか？」

不服そうな顔の矢島局。

○同・同・お楽の部屋

呆然としているお楽——と、鶴岡が入ってくる。

鶴岡「失礼いたします。お万の方様のお越しにございます」

お楽「お万の方様……？」

と、鶴岡が控えると、竹千代を抱いたお万が入ってくる。

お楽「お万の方様……」

と、抱かれている竹千代に気がつくと思わず駆け寄る。

お万「（微笑んで）竹千代君にございます」

お楽「竹千代……」

お万「さあ……」

お楽、竹千代を抱きかかえる。

お楽「竹千代……（と感極まる）」

お万「何を小さくすることがありますう。

あなた様はお世継ぎのご生母ではございませんぬか。將軍となられる若君には、たくさん愛情を注いでやらねれば、ご立派な天

下人にはなれませぬ」

お楽「お万の方様……」

お万「これからも、もつと愛情を注がれませ。

竹千代きみが、ご立派な將軍になられるた

めにも」

お楽「はい……」

幸せそうに竹千代を見つめるお万とお

楽——鶴岡、ふと廊下を見ると、慟然

としたまま立っている春日局がいるこ

とに気がつく。

○同・同・お万の部屋

お万と春日局が話している——側に控

える鶴岡。

春日局「勝手なお振る舞いは困ります」

お万「……」

春日局「竹千代君は、ただの赤子ではござい

ませぬ。上様の後を継がれる將軍家の大切

なお世継ぎにございます。それを勝手に、

お楽のお方様に竹千代君を抱かせるなど、

これでは乳母の矢島殿の立場がないではございませぬか」

お万「竹千代君がお世継ぎであることは、私も良う心得ております。されど、お樂の方様は、お腹を痛めてお産みになった実の母上にございます。母がわが子を抱くのに、何故、春日様や矢島殿のお許しが必要なのか、その訳をお教えくださいませ」

春日局「……」

お万「今後、お樂の方様には、竹千代君とお会いになれるような場を設けていただきませう、私からお願い申し上げます」

春日局「そのようなこと……」

と、家光の声が聞こえる。

家光の声「わしからも頼む」

一同、振り向く――御伽坊主と赤澤を従えた家光が立っている。

春日局「上様……」

一同、平伏する。

家光「竹千代をお樂に会わせたこと、わしが

許したのじゃ」

春日局「……」

家光「春日。わしは、そなたを母と思うておる。それは、亡き母・お江与が、わしよりも弟の忠長を可愛がって、そなたが母以上にわしに愛情を注いでくれたからじゃ。実の母が側にいながら、母の愛を知らずに育つのはわしだけでたくさんじゃ。竹千代には、母であるお楽、乳母である矢島、双方の愛情を受けて育ってほしいと思っておる」

春日局「……」

家光「全てを見てきたそなたなら分かるであろう。お楽の気持ちも、矢島の気持ちも」

春日局「……」

家光「お万とて、お楽や竹千代のことを思うてくれておる。そなた同様、わしや將軍家のことも考えてくれておる。その気持ちに分からぬか」

春日局「……」

お万「上様……」

赤澤「……」

鶴岡「……」

家光「この件は、お万に委ねよ。お楽のことを気にかけておるお万でなければ、思い立たなかったことであろう。良いな」

と、御伽坊主と赤澤を従えて去っていく——平伏して見送るお万、春日局、

鶴岡。

お万「春日様、では、よろしいですね」

無然と去っていく春日局。

N「お万の願いは受けいれられ、お楽と竹千代の対面は、ひと月に幾度も設けられた」

○同・同・お楽の部屋（二年後）

竹千代を抱きかかえているお楽——隣で見ているお万。

お万「もう竹千代君も二歳になれましたか」

お楽「はい。本当、健やかにご成長されております」

お万「子どもの成長というのは、早うござい

ますね」

お楽「お万の方様のおかげで、私はこうして
竹千代君のご成長を目にすることができて
おります。感謝いたしております」

お万「私は当然のことを申し上げただけのこ
とでございます」

お楽「お万の方様……」

お万「竹千代君が、どのように將軍になられ
るのか、これから楽しみでございますね」
お楽「はい。それを、私の生きがいにしよう
と思います」

笑い合うお万とお楽——と、矢島局が
入ってくると、

矢島局「もう、よろしゅうございますね」

と、無理やり竹千代を抱えて、去って
いく。

お万「矢島……」

黙ったままのお楽。

○同・同・お万の部屋

お万が不機嫌そうに戻ってくる――迎

える鶴岡。

鶴岡「お帰りなさいませ」

お万「……」

鶴岡「如何なされました？」

お万「竹千代君の行く末が心配じゃ」

鶴岡「また、矢島殿が何か？」

お万「また？」

鶴岡「近頃、女中たちが噂しているのでございます。矢島殿が、春日様のようになられるのではないかと」

お万「どうということじゃ」

鶴岡「矢島殿は、お世継ぎである竹千代君の乳母。竹千代君が將軍になられた暁には、矢島殿は、春日様同様、大奥筆頭御年寄になるのではないかと」

お万「その話、無きにしも非ずじゃな」

鶴岡「矢島殿が筆頭になどなれば、この大奥はどうなりますことやら……」

お万「いや、案ずることはない」

鶴岡「と申されますと？」

お万「竹千代君には、お母上であるお樂の方
様がおられる。矢島殿の好きにはならぬで
あろう」

鶴岡「矢島殿が、大人しくしているとは思え
ませぬが……」

お万「……」

鶴岡「この大奥においては、將軍生母よりも、
筆頭御年寄が勝ってしまうのです。余程実
権を握らねば、例え將軍生母であろうとも、
難しいかと……」

お万「どうにもならぬのであろうか……」

と、足音が聞こえ、中臈を引き連れた
お玉が入ってくる。

お万「お玉……」

○同・同・茶室

お万とお玉が話している。

お万「今……何と申された」

お玉「上様のお子をお産みしたいのです」

お万「……」

お玉「私も上様のご側室。お楽の方様だけ、お世継ぎのご生母様と崇められるのは腑に落ちませぬ」

お万「お玉……」

お玉「上様の後をお継ぎになるのは、竹千代君だけではございませぬ。私も、男の和子様をお産みいたします」

お万「そなた……」

お玉「私は産みます、必ず」

お万「……」

お玉「春日様がお楽の方様を差し出した故、私もあなた様の頼みとあらばと思い、この身を上様に差し出しました。しかし今や、お万様とて、お楽の方様にお力添えをしておられる。これでは、私は何のためにご側室になったのか分かりませぬ」

お万「……」

お玉「ご側室になった以上、上様のお子を産むことこそ、誠の幸せ、ましてやそのお子

が男児で、將軍職となれば……」

お万「お玉そなた、將軍生母の座を……」

お玉「ご側室となったからには、そういう夢を抱くのは当然でございましょう。將軍生母となれば、栄耀栄華で、一生安泰でございます。お万様とて、上様とのお子を臨まれておられたのですから、そうお考えになられたこともありましょう」

お万「いや……私は、ただ上様と幸せな生活を一緒にできればそれで良いと思うておる」

お玉「欲がないのですね、お万様は」

お万「……」

お玉「ご側室となってよりこの方、私の夢は、ひとしおに強くなりました。何としても、私は上様とのお子を産みます。そして、いずれは將軍生母になります」

お万「……」

お玉「ご側室にしていたいただいたこと、感謝申し上げます。今の私がいるのは、あなた様のおかげにございます」

と、一札すると去っていく——険しい
顔で見送るお万。

○同・同・お万の部屋

お万と鶴岡が話している。

鶴岡「お玉の方様がそのようなことを……」

お万「お玉を上様のご側室にしたこと、間違
えていたのでしょうか……」

鶴岡「お玉の方様も、一人の人間にございま
す。お楽の方様に対しての羨望と嫉妬によ
って、欲が出たのでございましょう」

お万「変わってしまったわ、お玉は……」

大きな溜息をつくお万。

N「お万と、かつて部屋子であつたお玉の関
係性はこの頃から壊れ始めていた。大奥中
がお楽に対して羨望の眼差しが向けられて
いることに対して、お玉は自身の側室とし
ての役割を果たしたいと思っていたのであ
る。お万に仕えていた頃のお玉の姿は、も
うなかった。お万はこの時、お玉と決別し

ても良いとさえ思っていた」

○同・同・春日局の部屋（夜）

春日局が、胸を押さえながら入ってくる――苦しそうにその場に座り込む。

N「そして同じ頃、病魔は少しずつ、春日局の体を蝕み始めていたのである。命の灯が消えるまで、刻一刻と迫っているなど、この時の春日局は知る由もなかった」

○同・同・長局（数日後）

茶を飲みながら話している竹川、赤澤、

鶴岡。

竹川「お玉の方様にも困ったものじゃな」

鶴岡「お万の方様は、その事で随分と頭を抱えておられるようで」

竹川「無理もない。元を正せば、上様のご側室にとお玉の方様を差し出したのは、お万の方様じゃからな」

鶴岡「しかし、それは春日様がお楽の方様を

差し出されたことに対する反抗のようなものにございます」

竹川「ご側室になられた故、お子が欲しいなど、お万の方様の心中も察せず、あまりと言えばあまり……」

赤澤「いや……お玉の方様の申し分も、理に叶っているかと」

鶴岡「何故にございます？」

赤澤「お玉の方様はご側室。なればこそ、上様のお子を産みたいというお気持ちは分かりますぬでもない」

竹川「他のご側室方がお子を産めば、お世継ぎ争いは避けられぬであろう」

鶴岡「お世継ぎ争い……お世継ぎは、竹千代君ではございませぬのか」

竹川「万が一、竹千代君が若くしてご逝去されれば何とする？」

鶴岡「それは……あッ……」

赤澤「蒔く種は、多い方が良い。芽が出るのならば、なおのこと」

竹川「春日様も今頃、同じ考えをお持ちであろう」

○同・表・対面の間

春日局と土井が話している。

土井「上様にお子をも？」

春日局「はい」

土井「竹千代君というお世継ぎがいながら、何故そのような。春日殿のお考えとは思えぬ」

春日局「竹千代君の御身に万一のことあらば、神君家康公の築かれしこの徳川は如何あいなりましょう。盤石となった幕府を、三代で終わらせても良いのでしょうか」

土井「それは……。されど、もし竹千代君に弟君がお産まれになったら、何といたす所存か」

春日局「長幼の序を説きます」

土井「長幼の序……」

春日局「神君家康公は、長幼の序をお説きに

なり、三代將軍には弟の忠長殿ではなく、上様にとお決めになりました。四代將軍に
おいても、後の徳川においても、長幼の序に従ったお世継ぎを決めねばなりません

土井「春日殿……」

春日局「全ては上様の御為にございます」

と、胸を押さえて、痛みをこらえる。

土井「春日殿……？」

春日局「大事ございませぬ……」

土井「お顔の色が……」

春日局「少し休めば、大したことではございませぬ……」

不安そうな顔の土井。

○同・大奥・御鈴廊下

襖が開き、春日局が戻ってくる――平

伏して迎える赤澤や中臈たち。

春日局、歩いていくが、やがて足がよろめき、その場に倒れ込む。

赤澤「春日様……？　春日様……」

周囲の中臈たちも慌てて駆け寄る。

○同・同・春日局の部屋

寝込んでいる春日局の治療をしている
順庵——不安そうに付き添っている竹
川。

N 「春日局の病は著しく悪化し、御典医順庵
の診立ての甲斐もなく、余命幾ばくもない
との沙汰が下ったのである」

○同・同・お万の部屋

仏像に手を合わせているお万。

○同・同・春日局の部屋

うなされている春日局——治療を続け
ている順庵と、不安そうに見ている竹
川。と、そこへ、御伽坊主と赤澤を従
えた家光が入ってくる。

竹川「上様……」

順庵「上様」

家光「良い、続けよ」

家光、不安そうに春日局を見つめる。

春日局「（目を開けると）上様……」

家光「春日……」

春日局「上様……。ほんに、大きなられま
したな」

家光「……」

春日局「私は……地獄へ参りましょう……」

家光「何を言う……」

春日局「お江与の方様から上様を取り上げ、
御台様やお万の方様を上様から離し、そし
てまた、上様にお子をなしていただくため
に、お楽の方様を重んじる心もいつの間に
か無くしております」

家光「……」

春日局「これが、私の報いであらう
なあ」

家光「春日……」

春日局「上様に、申し上げたき儀が……」

家光「何じや、申してみよ」

春日局「もっとお顔を近うに……」

家光、春日局に顔を近づける——春日

局、家光の耳元で何かを囁く。

家光「……！」

春日局「何卒、お頼み申し上げます……」

家光「春日……」

ゆつくりと微笑む春日局。

○同・同・仏間

手を合わせている家光——お万がやってくる。

お万「こちらにおいででしたか」

家光「お万か……」

お万「春日様のご容態は……？」

家光「それが……春日は、薬を飲んでくれぬのじゃ。わしが何度言うてもな……」

お万「薬を……。何故でございますか？」

家光「わしが幼き頃、痘瘡を患ったことがあったな。春日はその時、わしの完治を祈願し、薬は一生飲まぬと誓ったそうじゃ」

お万「そのような……薬を服さねば、治るものも治らぬではありませんか」

家光「そなたも存じているであろう。春日は、一度決めたことは曲げぬのじゃ」

お万「……」

と、赤澤が駆け込んできると、

赤澤「上様……。春日様が……」

家光「春日がどうした？」

○同・中の丸・孝子の部屋

女中からの報告を受ける孝子。

孝子「そうか……。春日殿が身罷られたか……」

……

○同・大奥・春日局の部屋

春日局の死に顔を見つめている家光――

――付き添っているお万。

家光、やがて涙がこみあげてきて、突っ伏して号泣する。

やりきれないように見ているお万――

その目にも涙が浮かんでいる。

N 「寛永二十年、西暦一六四三年の初秋、徳川のために生涯を捧げてきた春日局は、六十四歳の波乱の人生に幕を閉じた。家光の思いもむなしく、最期まで薬を服することはなかったと言われている」

○同・外観

N 「春日局が没して数日後、後を追うように高齢であつた僧侶天海もこの世を去つた。將軍家光を幼き頃より支えた二人の相次ぐ死は、家光を酷く悲しませた。そして、年の瀬も迫つた師走のこと、大奥御広座敷に大奥中の女中たちが召集された」

○同・大奥・御広座敷

家光、お万、孝子、お楽、お玉、竹川、赤澤、鶴岡、矢島局、その他女中たちが集まっている。

家光 「春日の死は、誠にもって残念であつた。

じゃがこれからも、そなたたちにはこの大
奥で励んでほしい」

一同「……」

家光「春日亡き後、筆頭御年寄の座が空いて
おったが、この度、春日の遺言に従い、お
万を筆頭御年寄に任ずることにした」

騒然とする一同。

お万「……」

唾然としているお玉と、不服そうな顔
の矢島局。

家光「お万（と目配せをする）」

お万「この度、不肖ながらこのお万、春日局
様よりの命を受け、筆頭御年寄をあい務め
させて頂いただきます。未熟者故、春日様の
ようには参りませぬが、この職、精一杯励
む所存にございます。何卒、よろしくお願
い申し上げます」

と、平伏する——一同も合わせて平伏
する。

○同・同・竹千代の部屋

竹千代と遊んでいる矢島局。

矢島局「おのれ……このままでなるものか」

○同・同・千鳥の間

書類を見ているお万——側に控える竹川。

竹川「ほんに、良うございました」

お万「何がじゃ」

竹川「春日様亡き後の、筆頭御年寄にございます」

お万「今わの際に、春日様が上様にお申し付けになったそうじゃ。私の亡き後は、お万の方様に大奥を任せたいと」

竹川「左様でございましたか」

お万「上様からこの話をお聴きした時、断ろうとも思っただのじゃが、上様も春日の思いを叶えたいと、そう仰せられて」

竹川「……」

お万「私は、竹川殿が良いと申したのじゃが」

竹川「滅相もないことでございます。私が筆頭など……」

お万「竹川殿も、この大奥のことをよく分かっておるではないか」

竹川「しかし私など、春日様の足元にも及びませぬ」

お万「そのような」

竹川「それに私は、春日様は矢島殿を任ずるものとはかり」

お万「矢島殿……？」

竹川「ご老中の松平公と共に乳母を決めたのは私でございますが、近頃の矢島殿はどうも……。竹千代君が將軍職をお継ぎになれば、矢島殿の権威は揺るがぬものになります。しょう。ともなれば、この大奥とて、矢島殿の思うがまま。筆頭御年寄の職にお万の方様が就かれたとは申せ、矢島殿がどのような手を使ってくるか。今、矢島殿を野放しにしては、それこそこの大奥でどのようなことが起こりますことやら……」

お万「……矢島殿か。油断してはならぬな」

と、矢島局の声が聞こえる。

矢島局の声「失礼いたします」

思わず顔を見合わすお万と竹川——矢

島局が入ってくる。

矢島局「お万の方様。この度は、筆頭御年寄

ご就任、おめでとう存じます」

お万「ありがとうございます。竹千代君は、健

やかにお育ちになられておるか？」

矢島局「はい。今は、お母上お楽の方様と遊

ばれておられます。將軍になられる若君に、

あまり母の情を移してはとも思うのですが

……」

お万「上様がお決めになられたことじゃ。ま

さかそなた、上様の御心に背くと言われる

か？」

矢島局「とんでもないことでございます。私

はただ、竹千代君のためにお仕えする御身

なれば」

竹川「その御身であるそなたが、何用です？」

矢島局「私を、御年寄にさせていただきませぬか？」

お万「何じやと……」

矢島局「私は、竹千代君の乳母。竹千代君はお世継ぎ様にございますれば、私にも、分相応の位を賜りたいと」

竹川「身の程をわきまえぬか。分相応の位と申すのであれば、乳母だけでも誉ではないか。御年寄など、何と図々しい……」

矢島局「おや、では春日局様は如何なのです」

竹川「……」

矢島局「春日様は上様の乳母だったではございませぬか。ならば私も」

お万「春日様は、この大奥を創られしお方じや。そなたとは比べものにならぬ。春日様と並ぶなど、何と恐れ多いことか。浅はかな考えなどするものではない」

矢島局「ならば、私が上様に直にお願い申し上げます。方々では、話になりませぬ故」

と、一札すると、荒々しく去っていく

――啞然としている竹川。

お万「何というおなごじゃ……」

竹川「お万の方様、如何いたしましょう……」

お万「仮に御年寄になつたとしても、竹千代君にはお樂の方様がついておられる。こうなれば、我らでお樂の方様をお支えし、矢島殿のなさりようを、何としても止めねばならぬな」

竹川「はッ（と平伏する）」

陰しい顔のお万。

N「矢島局はこうして御年寄の座を手にし、少しずつ自身の勢力を広げていったのである。春日局亡き後、お万の前に立ち塞がった矢島局の行いは、お万を辟易とさせ、ついにはお樂に対して竹千代を会わせぬという暴挙に出た。それにより、お万と矢島局の対立も著しいものとなった。竹千代が成長していくにつれ、矢島局は自分が世継ぎの母であるような振る舞いが増えていった」

○同・同・お玉の部屋（二年後）

N「そして、二年が経ったある日のこと……」

お万が来ており、上座に座っているお

玉と話している。

お万「ご懐妊されたというのは、誠にござい
ますか？」

お玉「はい。待ちに待った、上様のお子でござ
います」

お万「……」

お玉「嬉しくないのですか？」

お万「……」

お玉「（腹をさすって）この子は、必ず天下
人にしてみせます。そうなれば、私もお
万様も、更に権勢を振るうことができるの
ですよ。もっと喜んでくださると思いまし
たのに」

お万「……おめでとう存じます」

お玉「元気な若君を産んでみせます」

懽然としているお万。

○同・庭（六年後）

桜が待っている。

N「やがて更に時は流れ、慶安四年、西暦一六五一年、春」

○同・西の丸・家綱の部屋

書物を読んでいる家綱（竹千代改め）

——付き添っている矢島局。

N「家綱と改めた竹千代は十歳になり」

○同・大奥・中庭

お玉の子・徳松が、女中たちと遊んで

いる——近くで見ているお玉。

N「お玉の産んだ子・徳松は、五歳となった」

○同・同・千鳥の間

墨を磨っているお万。

N「そして、お万は変わらず、筆頭御年寄として、せわしない毎日を送っていた」

と、竹川が入ってくる。

竹川「失礼致します」

お万「竹川殿、如何なされた」

竹川「お樂の方様が、お呼びにございます」

お万「お樂の方様が……？」

不穩な顔のお万。

○同・同・お樂の部屋

お万とお樂が、深刻そうに話している。

お万「左様で……」

お樂「先刻、上様のお見舞いに伺いましたら、

御典医殿がそう申しておりました」

お万「私が先日お見舞いに伺いました折は、

気分が良いと仰っておりましたのに……。

そこまで芳しくないとは……」

お樂「もう、上様がお渡りになることはない

のでしょうか……」

お万「そのような……」

お樂「申し訳ございませぬ……。ただ、一人

でいると、妙なことばかり考えるようにな

りまして……」

お万「……」

お楽「一人というのも寂しいのです。家綱公が、矢島殿と共に西の丸に移られて半年。一度たりとも、お顔すら見ておりませぬ」

お万「……」

お楽「わが子に会えぬだけでなく、今度は上様がお倒れになって……。私は、何のためにこの大奥にいるのか、分からなくなってしまうのです……」

お万「……」

お楽「今はただ、上様のご快癒をお祈りしようかと思います」

お万「そうですね……」

お楽「……」

お万「家綱公のことは、私から矢島殿に申し上げておきます」

お楽「お万の方様……」

大きく頷くお万。

○同・同・長局の一室

竹川、赤澤、鶴岡が菓子を食べながら

話している。

竹川「それで、お万の方様は、今西の丸に？」

鶴岡「はい。それはたいそうご立腹で……」

竹川「無理もない。御年寄に取り立てられて
幾年も経つが、矢島殿は、最もらしいこと
をしてはおらぬ」

赤澤「権勢を我が物にしたいだけの行いとし
か思えませぬな」

竹川「西の丸は、將軍継子がお住まいになら
れるところ。上様が、お世継ぎを家綱公と
決められた途端、西の丸に移られて。矢島
殿の手の早いことときたら……」

鶴岡「西の丸に移られてから、お楽の方様は
一度も家綱公にお会いになられていないと
か」

竹川「あれほどお万の方様をご尽力なされて、
お楽の方様が家綱公とお会いになる場を設
けてくださったと言うのに、矢島殿はいつ
の間にかそれすらも反故にしておって……」

鶴岡「まるで家綱公が、わが子であるような
お振る舞いにございますな」

赤澤「そういえば、よからぬ話をお聞きいた
しました」

竹川「よからぬ話？」

赤澤「はい」

鶴岡「何でございます？」

赤澤「おそらくそれも、今頃お万の方様がお
話しになられているでしょう」

○同・西の丸・一室

お万と矢島局が話している。

矢島局「もう、お耳に入っておりますか」

お万「家綱公付の御年寄を新たに迎えるなど、
勝手に決められては困ります。大奥は、そ
なただけのものではない」

矢島局「私は家綱公の乳母。家綱公に関わる
ことは、全てこの私にお任せいただきとう
存じます」

お万「じゃが、御年寄就任となれば、大奥の

人事に関わること。そなたの一存では決められぬ」

矢島局「……」

お万「勝手な振る舞いは、以後慎むように」

矢島局「……」

お万「お楽の方様のこと、頼みますぞ。家綱公は、そなたのお子ではない。お楽の方様のお子じゃ。乳母ならば乳母らしく、余計なことをするではない」

と、睨みつけると、憤然と去っていく。
矢島局、怒りがこみ上げ、扇子をへし折る。

○同・大奥・お楽の部屋（夜）

お楽が眠っている――目を覚ますと、
大きな溜息をつく。

○同・中奥・家光の部屋

布団で休んでいる家光――お万が見舞いに来ている。

家光「そなた、春日によう似てきたな」

お万「まあ、お戯れを」

家光「そなたには、辛いことばかりさせた。

尼から還俗させ、子もできぬ体になり、今

は大奥の筆頭御年寄……気が重いであろう」

お万「そのような……」

家光「疲れておるのではないか？」

お万「……」

家光「今の大奥は、そなたがおらねば成り立たぬ。大奥のことも家綱のことも、頼むぞ」

お万「上様……」

家光「御台所もおれば、そなた以外に何人も側室を設けた。じゃが、わしが本当に好き

なのは、お万、そなただけじゃ」

お万「……」

家光「昔、夜伽の時、そなたも申したではないか。わしを慕っておると」

お万「上様……まさかあの時……」

家光「まだ起きておった」

お万「上様……」

笑い合うお万と家光。

家光「あの頃の気持ち、まだ持っておるか？」

お万「……はい」

家光「誠か？」

お万「（家光の手を握ると）私は今でも、上様のことをお慕い申しております。私には、上様しかおりませぬ」

家光「わしもじゃ」

お万「上様……」

家光「少し、休む」

お万「では、私はお暇を」

家光「いや」

お万「……？」

家光「ここに、おってはくれぬか」

お万「かしこまりました」

家光、ゆっくりと目を閉じる――その家光の寝顔を微笑みながら見ているお万。

N「その夜、三代将軍・家光は、四十六歳で没した。まるでゆっくりと眠りにつくよう

な安らかな死であつた」

○同・中の丸・孝子の部屋（一ヶ月後）

落飾の儀をしている孝子。

N 「家光逝去から一ヶ月の後、將軍家として盛大な葬儀が執り行われ、御台所と側室たちは落飾をした。御台所孝子は本理院」

○同・大奥・お楽の部屋

落飾の儀をしているお楽。

N 「お楽は宝樹院」

○同・同・お玉の部屋

落飾の儀をしているお玉。

N 「お玉は桂昌院と、それぞれ名を改めた」

○同・同・廊下

竹川、赤澤、鶴岡、その他女中たちを従えて歩いているお万。

N 「が、側室の中でお万だけは落飾せず、名

をお梅の局と改め、大奥最高の地位である
大上臈となった。それに伴い、筆頭御年寄
は春日局とお万を長きに渡って支えていた
竹川が就任することとなった」

○同・表・黒書院

家綱がやって来ると着座する――松平、
その他家臣たちが平伏して迎える。

N 「家光の遺言通り、嫡男・家綱が四代将軍
として跡を継いだ。まだ幼き将軍であつた
ため、大老・土井利勝の死後、陰で政権を
支えていた老中・松平信綱が、正式な後見
人となった」

松平、頭を上げると、

松平「上様におかれましては、ご機嫌麗しく
恐悦至極に存じ奉ります。我ら家臣一同、
上様が政を恙なく司れますよう、一丸とな
つてお守りいたす所存にございます」

平伏する一同。

○同・大奥・宝樹院（お楽）の部屋

お楽（以下宝樹院）、お万（以下お梅の局）、竹川が慥然と座っている――御年寄・近江局が平伏しており、矢島局が引き合わせている。

N「家光逝去によりお梅の局が様々な対応に追われていたのを良いことに、矢島局によって召し抱えられた御年寄が、突然大奥へ上がったのは、それから間もなくのことであった」

矢島局「これなるは、本日より上様付の御年寄となりました、近江局殿にございます」

近江局「近江にございます。上様にお仕えできますこと、光栄に存じます」

宝樹院「大儀である」

近江局、平伏する。

矢島局「では、私共はこれにて」

と、平伏すると、近江局と共に去っていく。

竹川「あのような身勝手……」

お梅の局「矢島殿にも困ったものじゃ……」

竹川「一難去ってまた一難とは、この事にございますな」

宝樹院「一難？」

竹川「桂昌院お玉の方様にございます。いくら春日様のご意向で、他のご側室方にもお子を産んでいただいたとは家、徳松君を將軍にするなど……」

宝樹院「……」

お梅の局「じゃが、亡き家光公は、生まれた時から家綱公をお世継ぎにと、お決めになつていたそうじゃ。それでも桂昌院様は納得されなかった故、私が長幼の序を説いたのじゃ」

宝樹院「左様でございましたか……」

お梅の局「その桂昌院様が大奥を去られたかと思えば、あの近江局殿……」

竹川「筆頭である私や、大上臈であるお梅の局様の許しもなく……」

お梅の局「ますます図に乗るであろな」

宝樹院「家綱公……いや、上様がまた遠いお方になってしまったような気がいたします」

竹川「……」

お梅の局「何を仰せられます……。私たちで、上様をお守りいたさねばなりません。

宝樹院様は、今や將軍ご生母。矢島殿や近江殿に、何の遠慮がいりましょう」

難しい顔の宝樹院。

N「このようなことが災いし、かねてより病弱であつた宝樹院あ、この頃から体調の優れぬ日々が続いていた」

○同・同・廊下（二年後）

慌てた様子で走っているお梅の局。

N「そして家光の死からまだ二年も経たない、承応元年、西暦一六五三年の冬のこと」

○同・同・宝樹院の部屋

お梅の局が駆け込んでくる——うなされて休んでいる宝樹院を診ている順庵。

お梅の局「宝樹院様ッ……宝樹院様……。

（と手を握ると）お氣を確かに……」

宝樹院「お梅の局様……」

お梅の局「……」

宝樹院「あの……」

お梅の局「……？」

宝樹院「……お願いが……ございます……」

お梅の局「何です……？」

宝樹院「上様……を……、家綱を……頼みま

す……」

お梅の局「（目を潤ませて）宝樹院様……」

宝樹院「あなた様に……出会えて……良かった……」

た……」

お梅の局「……」

宝樹院「後のことは……何卒……よしなに……

……」

お梅の局「……」

宝樹院「最後にもう一度……この手で……家

綱を抱きたかった。大好きな……わが子を

……この手で……」

と、ゆつくりと力尽きる——お梅の局、
ハッとなって、

お梅の局「宝樹院様……？」

順庵、宝樹院の脈を取ると、

順庵「ご臨終にございます」

呆然と宝樹院の死に顔を見つめるお梅
の局——やがて涙がこみあげてくると、
宝樹院の亡骸を抱きかかえる。

お梅の局「宝樹院様……お楽の方様ッ……」

○同・同・廊下

その場に泣き崩れる竹川。

○同・同・宝樹院の部屋

いつまでも泣き続けて、宝樹院の亡骸
を抱くお梅の局。

N「雪の降る寒い夜であつた。春日局の部屋
子として仕え、側室となり世継ぎを産み、
そして將軍生母となつた宝樹院お楽は、志
半ばで三十二歳という若さで、その生涯を

閉じたのであった。宝樹院の死によって、
將軍家綱の実母同様となった矢島局や近江
局の権勢は揺るがぬものとなり、お梅の局
や竹川との争いの火種となったのである。
案の定、お梅の局の不安は当たり、宝樹院
の死後、矢島局は更なる権勢のため、竹川
を実権のない上臈御年寄にさせ、自らが筆
頭御年寄の座に就いた。これにより、大奥
内での対立は深刻なものとなっていた」

○同・同・長局の廊下（三年後）

鶴岡が歩いている。

N 「宝樹院の死から三年。お梅の局は、長年
中臈として仕えていた鶴岡を御年寄に取り
立て、矢島局一派の権勢がこれ以上広がぬ
ように歯止めをかけたのであった」

○同・同・お梅の局の部屋

お梅の局と鶴岡が話している。

お梅の局「上様に、御台所を？」

鶴岡「はい。矢島殿と近江殿が、そうお決めに
なられた由にございます」

お梅の局「私だけ聞かされておらぬのか」

鶴岡「いえ……私も竹川様も初耳でございます
す。矢島殿と近江殿だけで進めたものかと」

お梅の局「……」

鶴岡「そのことで、御客応答の赤澤殿も酷く
ご立腹で」

お梅の局「上様お渡りの際、一切の接待をす
るお役目故、身勝手な振る舞いが許せぬの
であらう」

鶴岡「ほんに矢島殿や近江殿にも、困ったも
のにございますな」

お梅の局「……」

○同・同・千鳥の間

矢島局、近江局、赤澤が殺伐と話して
いる。

赤澤「上様に御台所をお迎えするお話、私は
何も伺ってはおりませぬ」

矢島局「ご生母宝樹院様が亡くなられて三年。上様とて、いつまでもお母上のことを思うよりも、新たに御台所をお迎えし、上様ご自身のご家族を拵えられたほうが良いと思うたのじゃ」

近江局「私も、矢島様のご最もなご意見に賛同いたしましたしてございます」

赤澤「上様の行く末をお考えになることも、賛同することも勝手にございますが、御台所をお決めになるのであれば、協議を重ねなければなりません。それをお二人で勝手にお決めになるなど……」

近江局「赤澤殿は、御客応答ではござらぬか。何故、そなたにお話しなければならぬのじや」

赤澤「私のことは良いのです。ただ、御年寄は他にも鶴岡様がおられ、竹川様は上臈御年寄、お梅の局様は大上臈におわします。矢島様や近江様が上様の乳母や御年寄であるとは申せ、勝手にはなりませんまい」

矢島局「それは……」

と、突然赤澤が激しく咳き込む――訝しく見る矢島局と近江局。

赤澤「失礼いたしました。それで……？」

矢島局「それはあくまで建前のこと。上様のことを一番よく存じてあげているのは、この矢島と近江殿じゃ。竹川殿でも鶴岡殿でも、ましてやお梅の局様でもござらぬ」

赤澤「……」

矢島局「方々にお申し付けください。権勢のない方々の口出しは無用に願うと」

憤然と去っていく赤澤。

○同・同・長局の廊下

咳をしながら歩いている赤澤――胸を叩きながら咳を止めていると、竹川が通りかかる。

竹川「赤澤殿」

赤澤「竹川様……」

竹川「鶴岡殿から伺った。そなた、矢島殿と

近江殿に直訴されたそうじゃな」

赤澤「御台所の一件、私も腑に落ちませぬ故」

竹川「……」

赤澤「このまま、あの二人を野放しにして良いのでございましょうか。これでは大奥の秩序が乱れ、行く末が案じられます」

竹川「それはそうじゃが……」

赤澤「春日様の作られし、この大奥。矢島殿の勝手気ままにしていたら、どうなりますことやら……」

竹川「……」

と、突然激しく咳き込む赤澤。

竹川「赤澤殿……」

赤澤、その場に座り込む――竹川、赤澤の背中をさすると、

竹川「大事ござらぬか？」

赤澤「申し訳ございませぬ」

と、更に激しく咳き込むと、吐血する。

竹川「赤澤殿……。（と周囲に向かって）

誰か、誰かおらぬかッ……」

愕然と赤澤を見ている竹川。

○同・同・お梅の局の部屋

お梅の局、竹川、鶴岡が呆然としてい
る――順庵が来ており、報告している。

お梅の局「今、何と申された……」

順庵「年を越せますかどうか……」

竹川「……」

鶴岡「……」

順庵「後は、赤澤様のお体がもちますことを
祈るしかないかと……」

竹川「もう……どうしようもないのですか？」

赤澤殿の命が助かるのであれば、この命差
し出しても良いのです」

お梅の局「竹川殿……」

順庵「致すべき治療は、全て致しました……」

鶴岡「では……後は死を待つのみということ
でございますか？」

順庵「恐れながら……」

険しい顔のお梅の局。

○同・同・長局の赤澤の部屋

赤澤が眠っている——お梅の局が付き添っている。

N「その日から、お梅の局は毎日、赤澤を見舞った。そんなお梅の局の状態を良いことに、矢島局や近江局は、竹川や鶴岡の声に耳も貸さず、御台所を迎える準備を着々と進めていき、婚礼は翌明暦三年、西暦一六五七年の夏と決まった」

○同・中奥・廊下

松平が歩いている——外を見ると、ふと立ち止まる。

遠くの方から黒煙が上がっている。

松平「あれは何の煙じゃ……？」

○江戸の街

建物という建物が軒並み燃えている。

○江戸城・天守閣

一面炎上している。

○同・大奥・お梅の局の部屋

呆然と座り込んでいるお梅の局――外から女中たちの騒々しい声が聞こえてくる。

女中の声「火事にございますッ……早う逃げてくださいませッ……」

ハッとなるお梅の局、立ち上がると、

竹川と鶴岡が駆け込んでくる。

竹川「火事にございますッ……」

お梅の局「火事……？」

鶴岡「ここは危のうございます。早くお逃げくださいッ……」

慌てて逃げていくお梅の局、竹川、鶴岡。

○同・同・長局

逃げまどっていく女中たち。

○同・同・廊下

避難している女中たち——その中で一緒に逃げているお梅の局、竹川、鶴岡。
お梅の局、ふと立ち止まると、

お梅の局「赤澤殿……。赤澤殿は無事であるか？」

竹川「……」

鶴岡「……」

お梅の局「見てまいる……」

と、踵を返そうとする——竹川、慌てて止めて、

竹川「これより先は、危のうございます……」

お梅の局「行かせてたもれ……」

竹川「お命を無駄にされるおつもりですか……」

……

お梅の局「赤澤殿を見殺しにはできぬ……」

と、竹川を払いどけると、戻っていく——鶴岡が慌てて後を追う。

鶴岡「お梅様……」

竹川「鶴岡殿ッ……」

と、呆然と立ち尽くす。

○同・同・赤澤の部屋

煙が立ちこめる中、白装束になって、
じっと座っている赤澤。

お梅の局と鶴岡が駆け込んでくる。

お梅の局「赤澤殿……。何じゃ、その格好は」

赤澤「私には、天罰が下ったのです」

お梅の局「天罰……？」

赤澤「春日様の命を受け、お子ができぬよう
になる毒を御膳にお入れたのは、私にご
ざいます」

お梅の局「……」

鶴岡「……」

赤澤「春日様のお指図は、お断りできません
でした。私は、お梅の局様から大事なもの
を奪った大罪人。病を患ったのは、その天
罰にございましょう」

お梅の局「そのようなこと……。もはや過ぎ

去った遠い昔のことではないか。御客応答として長く務め、私を支えてくれた。それで良いではないか……」

赤澤「かたじけないお言葉に存じます」

鶴岡「一刻の猶予もなりませぬ。さ、早く……」

赤澤「私のことは、もう良いのです……。もはやこの命、もう長くは持ちますまい……」

鶴岡「赤澤様……」

お梅の局「……」

赤澤「鶴岡様、お梅様のこと、頼みましたぞ」

鶴岡「……」

赤澤「お梅様、あなた様にお仕えでき、ようございました。これで冥土に逝けまする」

お梅の局「赤澤殿……」

赤澤「さ、早うお逃げくださいませ」

お梅の局「……」

鶴岡「（悔しさをこらえ）お梅様……参りましょう」

と、無理やりお梅の局の手を取り、去

っていく。

お梅の局「赤澤殿……赤澤殿ッ……」

平伏して見送る赤澤。

○同・平河門

避難してくるお梅の局と鶴岡。

お梅の局、火に巻かれていく城を見上げる。

お梅の局「赤澤殿……」

○同・大奥・赤澤の部屋

部屋一面が、火に巻かれている。

懐剣を抜く赤澤。

赤澤「春日様……今、参ります」

と、懐剣を心臓に突き刺す——ゆっくりと倒れて絶命する。

やがて、火の中に消えていく赤澤。

○小石川無量院・全景

○同・大広間

避難してきた女中たちが集まっている
——その中に孝子（以下本理院）の姿
もある。

竹川が入ってくる。

竹川「本理院様……ご無事でございましたか」
本理院「竹川、そなたも無事で何よりじゃ。

上様はどうじゃ？」

竹川「御老中方と早く避難なされて、ご無事
とのことにございます」

本理院「左様か……」

竹川「ただ、お梅の局様が、まだ……」

本理院「何と……」

竹川「療養中の御客応答・赤澤殿を見てくる
と、火の中へ……」

本理院「まだ戻ってきておらぬのか？」

竹川「はい……」

と、憔悴したお梅の局と竹川が入って
くる。

本理院「お梅殿……」

竹川「（ハッと振り返り）お二方とも、ご無事でしたか……」

お梅の局「……」

鶴岡「……」

竹川「赤澤殿は……？」

お梅の局「……」

○同・一室

お梅の局、竹川、鶴岡、本理院が話している。

竹川「……そのようなことが……」

鶴岡「赤澤様は、その罪を背負って、お梅様にお仕えしていたのです」

本理院「だからと言って、自害するなど……」

お梅の局「……」

鶴岡「赤澤様は、ご自身の病も天罰と仰せられて」

竹川「何と言うことじゃ……」

本理院「赤澤の病は、それほどに悪かったのか？」

竹川「御典医のお話では、年を越せるかどうかとのお見立てにございました」

本理院「診立てよりも、長くは生きられたのじゃな……」

鶴岡「赤澤様がお倒れになってからと言うものの、お梅様は毎日見舞いに出向かれておりました……。それが、ご快癒の兆しになったのかもしれない……」

お梅の局「無理にでも、連れ出せば良かった……。病が深刻とは申せ、赤澤殿には一日も長く生きていてほしかった……」

と、顔を伏せて泣き始める――やりきれないようにお梅の局を見つめる竹川、

鶴岡、本理院。

N「明暦三年、西暦一六五七年一月十八日から三日間に渡って続いたこの大火事は、江戸の大半が火の海となり、延焼面積や死者の数は、後にも先にも江戸時代最大のものとなった。『明暦の大火』と名付けられたこの火災により、江戸城は天守を含む大半

が焼失し、近隣の大木屋敷や市街地の大半も焼き尽くす甚大な被害となった」

○江戸の街

焼け野原となった一面を見る松平。

N「火災後まもなく、松平信綱は合議制であった前例を廃し、老中首座としての権限を強行。一人で諸大名の参勤交代停止や、人口統制による早期帰国などの施策を行い、災害復旧に力を注いだと言われている」

○小石川無量院・全景（三ヶ月後）

N「小石川無量院での避難生活を送っていたお梅の局の元に、神君家康の側室・清雲院が訪れたのは、火災より三ヶ月が経った麗らかな春のことであった」

○同・対面の間

お梅の局と清雲院が話している。

お梅の局「清雲院様におかれましては、変わ

らぬご様子にて」

清雲院「とんでもない。家康公が身罷れて、早四十年余り。私もこの通り、歳を取りました」

お梅の局「四十年……」

清雲院「お梅殿も、ご無事で何よりでございます。まさか、家康公の築かれし江戸城が火に卷かれるなど、思いもかけませなんだ。草葉の陰から、さぞお嘆きにございましょう」

お梅の局「家康公だけではございませぬ。秀忠公や家光公も、どれほどお力落としされておりますことか……」

清雲院「形あるものは、いずれ無くなる日が来ます。されど、それを生きてる間に目の当たりにはしとうございませぬな」

お梅の局「……」

清雲院「少々、おやつれになられましたか？

お顔の色が悪うお見受けいたします」

お梅の局「左様でございますでしょうか」

清雲院「お梅殿は、確か十六の頃に、大奥に
上がられたそうにございますな」

お梅の局「はい」

清雲院「家光公のご側室となられ、今は御大
奥最高の位である大上臈。これまでさぞ、
辛酸をなめられたことでしょう」

お梅の局「……」

清雲院「どうぞごさいますよう。一度ここで、
ゆっくりと養生なされては」

お梅の局「養生……？」

清雲院「ご無理なすることが全てではござい
ますまい。家光公も、分かってくれましよ
う」

お梅の局「……」

微笑んで大きく頷く清雲院。

N「お梅の局は、こうしてしばらくの間、小
石川無量院で、心身を休める静養生活に入
った」

○江戸城・平河門

駕籠の一行が通っていく。

N「お梅の局が大奥を去って間もなく、京より女乗物に乗った姫が、まるで入れ替わるように大奥へやってきた」

○同・大奥・顚子の部屋

駕籠の中から姿を現す御台所・顚子。

N「四代将軍・家綱の御台所、京の伏見宮家の第三王女である浅宮顚子である」

介添えをする付上臈御年寄・姉小路と飛鳥井。

N「そして同じく、京よりお付きの上臈御年寄として姉小路と飛鳥井も、大奥入りを果たしたのである」

○同・西の丸・大広間（三ヶ月後）

家綱と顚子の婚儀が行われている――矢島局、近江局、姉小路、飛鳥井、竹川、鶴岡、その他女中たちが一列に控えている。反対の列には、松平、同老

中・酒井忠清、その他幕閣たちが一列に控えている。

N「七月に入り、家綱と顓子の婚儀が、江戸城西の丸で執り行われた。本来婚儀は本丸で行われるものであるが、一月の火災により本丸が焼失し、再建されていなかったうえでの措置であつた」

○同・表・黒書院

家綱、松平、酒井、同老中・稲葉正則らが合議をしている。

N「この頃、表の政は、明暦の大火に関わることで、話が持ちきりであつた」

松平「火除地を設ける？」

家綱「そうじゃ。例の火災により焼失した市中の武家屋敷や神社仏閣の建て直しに必要な金子は幕府より出した。じゃが建て直しても、またあのような火事が起き、焼失したとあらば復興の意味もない。あの火災を教訓とし、建造物同士が延焼せぬようにす

るためにも、火除地は必定じゃ」

松平「いかにも……。 （と酒井に） 酒井殿、
如何であらうか？」

酒井「上様のお考え、ご最もながら、火除地
にする場がなければなりませんまい」

家綱「そうじゃな……。…」

稲葉「恐れながら……。…」

松平「稲葉殿、如何された？」

稲葉「火除地は、焼け跡となった場所を充て
るのは、如何でございましょうか」

家綱「そうじゃな。焼け跡を用ゆれば、火除
地として広く使える。稲葉、出かした。名

案じゃ」

稲葉「かたじけのうございます」

家綱「早速、取りかかるように」

一同「ははぁッ」

と、平伏する――真剣な顔の家綱。

○同・大奥・家綱の部屋

家綱と矢島局が話している。

矢島局「さすがは上様にございます。あの火事を教訓に火除地を設けるなど、老中方には考えもつきますまい」

家綱「わし一人の力ではない。稲葉が名案を出してくれたのじゃ」

矢島局「稲葉正則殿のことでございますね」

家綱「そうじゃ。稲葉の家の者は、皆徳川に仕えてくれておる」

矢島局「稲葉殿の父は、先代家光公に仕えていた稲葉正勝殿。その正勝殿の母は、この大奥を作られし春日局様。全ては、春日様より授かった縁というものでございます」

家綱「春日というのは、どのようなおなごであつた？」

矢島局「身も心も、將軍家に捧げられたお方にございました」

家綱「そうか」

矢島局「私も、上様の乳母となつたおなごにございます。春日様にならなければなりませんまい」

家綱「……」

○同・同・茶室

茶を飲み干す鶴岡——傍らに竹川。

鶴岡「結構なお手前にございました」

竹川「ありがとうございます」

鶴岡「お聞き及びでございますか、矢島殿の

こと」

竹川「あの者が、また何か？」

鶴岡「春日様にならうようなおなごになると、

先刻申されました」

竹川「とんだ戯言じゃ。あのようなおなご、

春日様の足元にも及ばぬ」

鶴岡「いかにも……」

竹川「春日様は、ご無体なことをなされた時もあつた。じゃがそれは、徳川を守るためになされしこと。それに比べ矢島は、自らの権勢のために、恐れ多くも上様を利用しておる。到底許されぬ行いぞ」

鶴岡「……」

竹川「このまま、あのおなごの思うがままになつて良いものか……」

鶴岡「……」

憤然としている竹川。

○同・同・顚子の部屋

女中が顚子に落雁を差し出す――側に控える姉小路と飛鳥井。

姉小路「御台様、本日は落雁をご用意いたしました。京の懐かしい味を、ご所望くださいませ」

飛鳥井「江戸の味は、お口に合いますまい。それに、大奥のしきたりもまた、おかしなものにございます」

姉小路「ほんに。御台様の御膳を十人前用意するなど、何とも妙なしきたりにございます。それに、一度箸をつけたら、すぐ次の御膳に取り変えて。これでは、お食事とてゆるりと召し上げられませぬ」

飛鳥井「お食事とて、江戸の味付けときたら

濃ゆいこと濃ゆいこと。御台様は京の薄い味付けがお好みなのに。これでは、お体に障りましょう」

顕子「私は、將軍家に嫁いだ身です。嫁いだ以上は、その家の習わしやしきたりに従うのが道理と言うものじゃ」

飛鳥井「嫁いだとは申せ、それは形ばかり。上様のお渡りもなく、顔も合わせぬのに、夫婦などと言えましょうか」

姉小路「夜伽の際は、控えの間で女中が夜な夜な、事の次第に聞き耳を立てて、そこでなされしことを全て、御年寄方に翌朝ご報告するとか」

飛鳥井「何ともおぞましいことにございますな。それでは、ゆつくりとお休みにもなれませぬ」

姉小路「やはり、この大奥とは妙なところにございますな。鬼や蛇がいつ出てきても、おかしくないことでございましょう」

飛鳥井「姉小路殿。この飛鳥井、御台様がこ

の大奥でゆるりとお暮らしになられるなど、
到底思えませぬ」

姉小路「私にもございます」

顕子「私のことは良い」

飛鳥井「良くはございませぬ。顕子様の御身に、万一のことあらば、京のお父上・伏見宮様にお顔向けができません」

姉小路「どうぞございましょう。この際、御年寄方をお願いしてみては」

飛鳥井「それが一番良いかもしれませぬな」

呆れ顔の顕子。

○同・同・千鳥の間

矢島局、近江局、鶴岡、姉小路、飛鳥井が話し合っている。

矢島局「（甲高く笑い）これは、否なことを申されまするな」

近江局「（失笑して）そのようなことで直訴するなど、私、見るに耐えませぬ」

姉小路「何がおかしいのです。夜お休みにな

られる時、控えの間に女中がいては、お疲れが取れませぬ」

近江局「御台様でも、お疲れになることがあるのですか？」

飛鳥井「このようなところでお暮らしになるだけで、御台様はお疲れになるのです」

鶴岡「恐れながらお二方、この大奥は亡き春日局様が將軍家のためにお作りになられたところにございます。古くから続く大奥のしきたりには、いくら御台様とは申せ、従うていただきます」

姉小路「その古いしきたりと言うのを、変えなければならぬのではございませぬか」

鶴岡「大奥のしきたりを変えるなど、そのようなことでできるとお思いですか」

姉小路「大奥における頂は、將軍のご正室である御台様。その御台様のお暮らしが不便とあらば、しきたりなど無くしてしまったほうが良いのです」

矢島局「控えられませ、姉小路殿ッ……」

姉小路「……」

矢島局「そのような発言、聞き捨てなりませぬ。しきたりを無くすなど、春日局様への冒瀆にございますぞ」

姉小路「亡くなられた方より、今を生きられるお方のことを考えるほうがよろしいのではございませぬか。古いしきたりがあるのであれば、それを少しずつ変えていくことも大事でございましょう」

飛鳥井「姉小路殿の申される通りにございませす。戦国の世を生きてこられたおなごの作られししきたりなど、今の世には合いませぬ」

矢島局「春日様を愚弄するようなお言葉や、大奥のしきたりに対する悪い言われよう、例え上臈御年寄として許しませぬぞ」

飛鳥井「そなた方に許しを請う言われはございませぬ。我らは御台所様付きの上臈御年寄。立場で言えば、そなたたち御年寄よりも上でございます」

鶴岡「……」

近江局「……」

矢島局「……」

姉小路「それと、御台様のお食事でございますが、もう少し味を薄くしていただかねば、とても食べられたものではございませぬ。

（と飛鳥井に）のう飛鳥井殿」

飛鳥井「江戸の味付けは、とてもとても口にできぬもの。御台様の舌に合うよう、工夫していただきとうございます」

矢島局「お食事の味まで変えろと言われるのですか」

飛鳥井「そなた方の食事の味まで変えろと申しているのではございませぬ。せめて御台様お一人のお食事の味だけでも変えてくだされと申しているのです」

近江局「しかし、そのような……。いくら御台様のお食事とは申せ、お毒味役も食すのですぞ」

飛鳥井「近江殿はおかしなことを申されます

な。この大奥は、御台様よりもお毒味役の心配をなされますのか」

近江局「……」

姉小路「兎にも角にも、全ては御台様の御為にございます。しかと頼みましたぞ」

と、いそいそと出ていく姉小路と飛鳥井——冷ややかな目で見送る一同。

矢島局「何と勝手な……」

鶴岡「勝手なのは矢島様とて同じこと。相談もなしに御台所を決められた故、このようなことになったのではございませぬか」

矢島局「……」

鶴岡「後のことは矢島様や近江様に、お頼み申しますぞ。竹川様を引きずり降ろして実権の無い上臈御年寄になさり、今や筆頭御年寄として大奥を仕切っておられるのであれば、その職務を全うしていただきとう存じます。名ばかりの筆頭など、無用な存在にございます」

と、荒々しく出ていく——苛立ちを隠

せず、不服そうな顔で鶴岡を見送る矢島局と近江局。

○同・同・廊下

懽然と歩いている姉小路と飛鳥井。

N「この頃、大奥では古いしきたりに反感を抱いている姉小路と飛鳥井一派」

○同・同・長局の一室

囲碁をしている竹川と鶴岡。

N「春日局が作ってきた大奥の伝統を重んじようとする竹川と鶴岡一派」

○同・同・千鳥の間

憤然と座っている矢島局と近江局。

N「伝統を重んじながらも権勢を我が物にしようとする矢島局と近江局一派。お梅の局が大奥を去った今、この三つ巴の争いが絶えぬ日々であった」

○同・同・廊下（数日後）

姉小路、飛鳥井、その他女中たちを従えた颯子が歩いている――反対側から矢島局を先頭に近江局やその他女中たちが歩いてくる。

矢島局たち、一礼をする。

矢島局「本日、久方ぶりに上様のお渡りがあるそうにございますな」

颯子「はい」

近江局「次のお渡りは、いつになりますことやら」

颯子「上様はご公務がお忙しいのです。何も夜伽をしたり、常に一緒にいことがなくとも、心が通い合えば、夫婦にはなれるのです」

姉小路「さすがは御台様。上様のことをよくお考えにございます」

飛鳥井「上様も、さぞお喜びになりましたよう」

矢島局「……」

近江局「……」

颯子「では」

と、去っていく颯子、姉小路、飛鳥井、
その他女中たち——恨めしそうに見送
る矢島局と近江局。

○同・同・御寢所（夜）

颯子と家綱が話している。

家綱「江戸の暮らしは、もう慣れたか？」

颯子「はい」

家綱「なかなか大奥へ来られず、すまぬ」

颯子「何故お謝りになられます。今、江戸
は大変な時にございましょう。上様がお忙
しいことは分かっておりまする」

家綱「御台……」

颯子「……あの、上様」

家綱「どうした？」

颯子「颯子とお呼びください。御台と呼ばれ
ることは、もう疲れました……」

家綱「……」

颯子「京にいた時は姫様、この大奥では御台

様……私が名前で呼ばれることなど、ない
のです」

家綱「わしもじゃ。幼名は竹千代、元服後は
家綱となったが、皆、わしのことを上様と
呼ぶ。誰も、家綱と、名で呼ばぬ」

顕子「上様は上様でございます故……」

家綱「顕子……」

顕子「……？」

家綱「わしがそなたを顕子と呼ぶ。そなたも、
わしを名前で呼んでくれぬか？」

顕子「（ぎこちなく）……家綱……様……」

家綱「（微笑んで）それで良い」

顕子、家綱に抱き着く——二人、笑い
合うと、そのまま横になる。

○同・同・竹川の部屋（翌）

花を活けている竹川——側に鶴岡。

竹川「上様と御台様が、仲睦まじいのであれ
ば、それに越したことはあるまい」

鶴岡「はい。それに、上様は本日も御台様を

「ご所望なされたとか」

竹川「昨日に渡り、本日までもか？」

鶴岡「はい。さぞ、御台様をお気に入りなのでございましょう」

竹川「これでいつまでも、上様が矢島の言いなりになることはなくなるであろうな」

鶴岡「矢島殿の悔しがる顔が、目に浮かぶようでございます」

○同・同・千鳥の間

憤然とした矢島局が、煙管を吸っている。

○同・同・御寢所（夜）

家綱と颯子が話している。

颯子「江戸の街は、少しずつ戻ってきているのですか？」

家綱「ああ。老中が今、あれこれと決めておる。本丸や北の丸も、建て直しがまもなく終わるそうじゃ」

颯子「火に焼かれて、影形がなくなったものも、再び蘇ることがあるのですね」

家綱「そうじゃな」

颯子「他には、何かあるのですか？」

家綱「ああ。火除地を、拵えておるところじや」

颯子「火除地？」

家綱「建物同士が重なっておると、火事になった時に火が移るであろう。その延焼を防ぐために、建物が何もない更地を拵えるのじゃ」

颯子「さすれば、町民どもの命も救えるという事でございますね」

家綱「ああ。逃げ場にもなるからの」

颯子「家綱様は、きっと世に名高い將軍になりましょう」

家綱「きつと……？」

颯子「いえ、必ず」

笑い合う颯子と家綱。

○同・同・千鳥の間

矢島局、近江局、竹川、鶴岡が殺伐と

話している。

矢島局「政の話を上様となさるなど、言語道

断ッ……」

近江局「よりにもよって、夜伽の折にそのような……。上様は、ご公務でのお疲れを癒すために奥泊まりをされると言うのに、全く御台様も何を考えなのであろうか」

鶴岡「しかし、上様は御台様とお話になりた
いが故、ご所望なされたのでございましたよ
う。お二人がどのような話をなされようが、
それを我らがあれやこれやと横車を押すの
は、違うのではありませぬか？」

竹川「矢島殿や近江殿は、上様と御台様が睦
まじくなられておるのが、気に入らぬので
ございました。まるで武家の姑のように」

鶴岡「左様でございましょうな。上様のため
というのは、所詮口だけのこと。京よりお
迎えした御台様が、事のほか上様のお気に

入りとなられたことが思いもかけぬことで、
御台様を説き伏せられぬことが、たいそう
悔しいのでございましょう」

矢島局「……」

近江局「……」

竹川「矢島殿は上様の乳母、近江殿は上様付
きの御年寄。上様のことをお考えになる身
であれば、ご自分の立場をわきまえられる
が良い。上様や御台様は、各々方の思うが
ままに動く人形ではない。良いな」

惘然としている矢島局と近江局。

○同・同・竹川の部屋

薬包紙を開き、薬を飲む竹川——大き
な溜息をつく。

N「この頃、竹川は長年の心労が重なり、体
調の優れない日々が続いていた」

○同・同・御鈴廊下（朝）

家綱を先頭に、頭子、矢島局、近江局、

鶴岡、姉小路、飛鳥井、以下お目見え

以上の中臈たちが歩いている。

N「上臈御年寄となってから表に姿を見せることが減っていた竹川だったが、やがて人目に出ることもなくなっていた」

○同・表・御広座敷

N「そして、それからまもなくのこと」

竹川、松平、酒井、稲葉が話している。

酒井「大奥を去ると申されるか」

竹川「はい」

稲葉「何故でござる？ 体を休めた後、また職務を……」

竹川「（遮って）いえ……私はもう、大奥にいてもいなくても変わらぬ身なのです」

酒井「竹川殿とは思えぬお考えじゃ」

松平「……」

竹川「今、大奥は三つ巴の争いとなっております
まする」

稲葉「三つ巴……？」

竹川「上臈御年寄・姉小路殿と飛鳥井殿、御年寄・矢島局殿と近江局殿。そして私と鶴岡殿。皆それぞれに守りたいものがあり、何かと衝突しております。しかし、病を患って静養しているうちに思うたのです。春日様はこのような争いを起こすために大奥を作られたのではないと。私は、春日様亡き今の、己の行いを恥じております。何かにつけて矢島殿や近江殿に反論し、姉小路殿や飛鳥井殿に、大奥のしきたりを無理強いさせております。そのようなことで、この大奥が良くなるとは思えなくなったのでございます。先々代秀忠公の時よりお仕えして参りましたが、いつまでも私のような者が大奥にいてはならぬのです。今や家綱公が四代將軍になられ、徳川は盤石なものとあいなりました。もう身を引いても良いと思うたのです。御台様も、上様との仲が大変睦まじいと聞き及んでおりますれば、何もご側室を無理にお薦めしたり、我ら年

寄が争うこともないのですよ」

稲葉「……」

酒井「……」

松平「……」

竹川「今ここで大奥を去りましても、私は何の悔いもございませぬ。それに、お江与の方様、秀忠公、春日様、家光公、宝樹院お樂の方様、赤澤殿……幾人もの方を見送って参りました。お城勤めの宿命やもしれませぬが、これ以上、誰も見送りとうはございませぬ」

酒井「……それほどまでに、もうお覚悟をされておいでか」

稲葉「……」

松平「……よう分かった」

竹川「……」

稲葉「松平殿……」

松平「拙者は、亡き先代家光公がお生まれになつてすぐ小姓に任ぜられてより、お仕えして参った。その時、竹川殿はまだ十代半

ばで、お母上・お江与の方様付きの女中で
あつたな」

竹川「そのような頃もございました」

松平「あの頃からもう五十年余りの歳月が流
れておる。十二分に、竹川殿は徳川のため
に尽くされた。我ら老中が敬意を心から表
しても、表しきれぬほどじゃ」

竹川「松平殿……」

松平「無理に止める力など、我らにはない。

竹川殿におかれは、これから養生し、ゆっ
くりと余生を送られるがよろしかろう」

稲葉「……」

酒井「……」

松平「竹川殿は、大奥の鑑じゃ。後にも先に
も、右に出る者はおらぬであろう」

竹川「……」

松平、竹川の側まで来ると、

松平「竹川殿。見事なお務めであつた。あつ
ぱれにございますぞ」

竹川「お言葉、かたじけのう存じます」

深々と平伏する竹川——大きく頷く松平。見守るように見つめている酒井と稲葉。

○同・大奥・御膳所

女中たちが料理の支度に追われている——控えの間で、矢島局と鶴岡が味見をしている。

矢島局「これぐらいの味で良いであろう」

鶴岡「薄過ぎるような気もいたしますが……」

矢島局「薄味を所望されたのは、姉小路殿と

飛鳥井殿。多少味が合わなくとも、文句を

言うなど筋違いじゃ」

鶴岡「……」

と、近江局が駆け込んでくる。

近江局「ああ、こちらにおられましたか」

矢島局「何事じゃ」

近江局「竹川様が、大奥を去ると」

矢島局「何と？」

啞然としている鶴岡。

○同・同・竹川の部屋

竹川が荷物の整理や片付けをしている

——走ってくる足音が聞こえてくる。

竹川が訝しそうに振り向くと、息を切らした鶴岡が入ってくる。

竹川「……」

鶴岡「竹川様……」

竹川「もう、そなたの耳に入ったか……」

鶴岡「はい……」

竹川「そなたと過ごした日々は、終生忘れることはないであろう」

鶴岡「……」

竹川「この大奥のこと、頼みましたぞ」

鶴岡「誠……大奥を去られるのですね……」

竹川「老中筆頭の松平様から、あつぱれとお言葉を賜った……。あのお方も、大したお方じゃ（と微笑む）」

鶴岡「何があつぱれでございますか……」

竹川「……」

鶴岡「後に残された私は、どうしたら良いのです……。私一人では、矢島殿や近江殿、姉小路殿や飛鳥井殿には、とても太刀打ちできません」

竹川「……」

鶴岡「私一人で、これからどうすれば……」

竹川「何も、争うことはないのじゃ」

鶴岡「……」

竹川「大奥は、おなご同士が意図的に、故意に争うておることばかりじゃ。しかし、そのようなこと、あつてはならぬ。我らだけでも、争わず、春日様が何故この大奥を作られたのかをよく考え、各々の職を全うせねばならぬ」

鶴岡「……」

竹川「これから、時の流れも変わっていくであらう。さすれば、この大奥とて変わる。そなたが、新しい大奥を作るのじゃ」

鶴岡「新しい……大奥……」

竹川「大奥とは、上様のお世継ぎを設けるた

めに、春日様が築かれた、言わば一つのお城のようなもの。時が経てば壊れるところも出てくる。今が、その壊れかけている時のやもしれぬ。そなたは、大工となって城を建て直すお役目があるのじゃ」

鶴岡「私が……大奥を建て直す大工……」

竹川「矢島殿や近江殿、姉小路殿や飛鳥井殿は、とてもそのような役目が務まる道理がないであろう。大奥を建て直すことは、そなたにしかできぬお役目じゃ」

鶴岡「竹川様……」

竹川「（鶴岡の手を握り）頼みましたぞ、鶴岡殿……」

目に涙を浮かばせている鶴岡。

竹川「（苦笑して）何故泣くのじゃ」

鶴岡「分かりませぬ……。自然と涙が……」

と、その場に泣き崩れる――優しく見つめている竹川。

○小石川無量院・全景

○同・廊下

本理院とお梅の局が歩いている。

○同・対面の間

旅装束の格好をした竹川が待っている

——本理院とお梅の局が入ってくると、
平伏して迎える。

竹川「お久ししゅうございます」

お梅の局「（怪訝そうに）竹川殿……？」

本理院「……？」

竹川「本日は、お別れを申し上げたく、参上
いたした次第にございますれば」

本理院「お別れ……？」

お梅の局「竹川殿、どういふことじゃ……」

竹川「実は、病を患いまして、この体では大
奥にいても無意味と思い、養生も兼ねて大
奥を去り、旅に出ることにいたしました」

本理院「……そうであつたか」

お梅の局「では、今大奥は……？」

竹川「鶴岡殿に、全てを託しました」

お梅の局「……」

竹川「鶴岡殿は、お梅様にお仕えし、お梅様によつて御年寄に取り立てられました。私が大奥を去ることも、最後まで反対しておりました。私が去ることで心細うなるのでございましょう。お梅様が大奥を去つて、まもなく一年余り。鶴岡殿は、私と共に大奥を守ってきました。病を患った私にはもうどうすることもできず、鶴岡殿に志を継いでいただき、私は大奥を去ることを決めたのでございます」

お梅の局「左様か……、寂しゅうなるな……」

竹川「春日様やお梅様にお仕えできましたこと、竹川、終生の誉と大参、余生を送ろうと思ひまする」

お梅の局「……」

本理院「長く徳川に仕え、大儀であつたな」

竹川「有難う存じます」

本理院「どうか、お体をいたわつて」

竹川「はい」

お梅の局「……」

本理院「お梅殿……？」

お梅の局「（涙をこらえて）竹川殿が大奥を
去るなど、思いもよりませなんだ……」

竹川「私も、亡き家光公のお母上・お江与の
方様にお仕えした頃より、この身は一生、
徳川のために捧げようと思うておりました。
まさか思いもかけず、病を患うなど……。
生きておると、何が起こるか分かりませぬ
が、これもまた運命というものでございま
しょう」

お梅の局「運命か……」

本理院「……」

竹川「どうか、末永うお元気で……」

本理院「そなたもな」

お梅の局「息災で……」

竹川「はい……」

と、深々と平伏する。

○同・表

竹川が出てくる――振り返り、建物を
見上げると、深々と一礼する。

○江戸の街

竹川が永遠と歩いている。

N「この日が、お梅の局と竹川の今生の別れ
となった。竹川は江戸を去っていったが、
この後、竹川の姿を見たものは、誰一人と
していなかった」

○小石川無量院・全景（夜）

○同・一室

夕食を食べている本理院――考え事を
しているお梅の局の手が止まっている。

本理院、お梅の局の様子に気づき、

本理院「大奥のことが、気がかりか？」

お梅の局「え……？」

本理院「竹川が大奥を去ったのじゃ。そなた

が、大奥を気にかけるのも無理はあるまい」

お梅の局「……」

本理院「本丸を始め、江戸城の建て直しが終わつたと聞く。この小石川無量院に来て一年余り。いつまでも、ここで世話になるわけにもいかぬであろう。私は、城に戻ろうと思う」

お梅の局「お城に、お戻りになられるのでございますか？」

本理院「中の丸か北の丸で、静かな余生を過ごそうと思うておる。本丸や大奥は、性に合わぬからの」

お梅の局「本理院様……」

本理院「年の瀬も近くなり、大奥に限らず、城中は忙しくなるであろう。それに紛れて、何事もないように、城に戻ろうと思うての。所詮私は、形だけの、飾りの御台所であつた女じゃからな」

お梅の局「……」

○江戸城・全景

雪が降り散っている。

○同・大奥・大広間

襖が解放されている。

颯子、矢島局、近江局、鶴岡、姉小路、飛鳥井、その他女中たちが集まっている――下級女中たちが、御膳を運んでくる。

颯子の元に、御膳が運ばれてくる――矢島局、近江局に目配せをする。

近江局「本日は、雪見酒の宴の席を設けさせていただきました。お食事も、御膳所の者たちが腕によりをかけております。どうぞ、ご賞味くださいませ」

姉小路「では、御台様」

颯子、椀を手にとると、吸い物を飲み始める――突然むせて、咳き込む。

一同、颯子のほうを振り向く――姉小路と飛鳥井、慌てて颯子に駆け寄る。

姉小路「御台様、如何なされました？」

飛鳥井、怪訝そうに腕の臭いをかぎ、

吸い物を口にとすると苦い顔をして、

飛鳥井「何じゃ、この味は……。とても口に
できぬ味付けではないか」

鶴岡、颯子たちの元に来ると、

鶴岡「失礼いたします」

と、箸を手にして煮物を食べると、苦
い顔になり、懷紙を取り出して吐き出
す。

鶴岡「これは……」

矢島局「おや、お口に合いませんか？」

鶴岡「（ハッと振り返り）矢島様……」

矢島局「京風の味付けは、我ら江戸の者には
どうも上手く支度ができません故」

近江局「御膳の支度をする女中たちの気持
ちも、お考えあそばされませ。江戸で暮ら
しならば、江戸の味に慣れていただかねば」

颯子「（うつむいて）……」

姉小路「味を薄くしていただきたいとは重ね

て申しましたが、口にできぬものを拵える
ように申した覚えはございませぬ」

飛鳥井「これでは、せつかくの宴も楽しめぬ
ではございませぬか」

近江局「しかし、今から作り直しなどしては、
雪が解けてしまいますな」

矢島局「ならば御台様にはお部屋に戻ってい
ただき、我らで宴を楽しみましょう」

今にも泣きそうな颯子。

矢島局と近江局、ほくそ笑む――その
二人を睨みつけている姉小路、飛鳥井、
鶴岡。全体の雰囲気がしらけている。

と、お梅の局がする。

お梅の局の声「では、こちらをお召し上がり
くださりませ」

一同、訝しく振り向く――御膳を運ん
だ女中を従えたお梅の局が入ってくる。

鶴岡「お梅様……」

矢島局、近江局、女中たちが唾然顔。
訝しそうにお梅の局を見る颯子、姉小

路、飛鳥井。

女中、颯子の御膳を取り変える。

お梅の局「御台様のお郷である京の味付けの御膳をご用意させていただきました」

颯子「そなたは……？」

お梅の局「これは失礼をつかまりました。

（と三つ指を立てて）大奥大上臈・お梅の局にございます」

颯子「お梅の局……？」

姉小路「もしや……参議六条卿の娘御……」

飛鳥井「伊勢慶光院院主となった後、還俗して、先代家光公のご側室になったという……」

颯子「（ハツとして）そなたが……」

お梅の局「（微笑んで）御台様は、京の伏見宮家の姫君と聞き及んでおります。また、上様との仲も睦まじいとか。私、御台様がつつがなく、この大奥にてお暮らしいただけますよう、お支えいたす所存にて」

矢島局「……」

近江局「……」

お梅の局、矢島局と近江局を見ると、

お梅の局「おや、お二方とも、まだおられたのですか。御年寄の重責に耐えられず、もういないものと思っておりますのに」

矢島局と近江局、怒りを抑えて、憤然と去っていく。

お梅の局、もう一度颯子に微笑む――
安堵の表情を浮かべる鶴岡。

○同・同・お梅の局の部屋

お梅の局と鶴岡が話している。

鶴岡「よくぞお戻りで……」

お梅の局「長い間大奥を空けてすまんのだ。

小石川無量院で養生している間も、大奥のことが気がかりでな」

鶴岡「竹川様も去られ、どうなるかと案じておりました」

お梅の局「私が大奥に戻ってきた以上、矢島殿や近江殿の好きにはさせぬ。上様や御台

様をお支えしてこそ、大奥のおなごと言う
ものじゃ」

鶴岡「かしこまりましたございます」

と、深々と平伏する。

○同・同・千鳥の間

矢島局と近江局が、苛立ちながら話している。

近江局「お梅の局様が戻ってこられるなど：
：よもや、また大奥での実権を？」

矢島局「案ずることはない。あのお方は大上
臈。位で言えば最高位なれど、実権はない」

近江局「されど、元は先代家光公のご寵愛を
一手に受けられたご側室。油断はなります
まい。それに聞けば、お梅の局様には、先
代ご正室・本理院様の後ろ盾もあるとか」

矢島局「容易いことじゃ。先代のご正室とは
言え、中の丸に長らく引きこもっておられ、
家光公との仲が陰悪であった本理院様など、
我らの敵ではない。そのような方を後ろ盾

にしたお梅の局様のことに、何もそこまで
気を揉むことはないであろう」

近江局「されど、気を抜きますれば、我らの
立場も危うくなりました」

矢島局「我らには上様がついておる。何も恐
れることはない。これまでと変わりなく、
大奥を我らの手で」

近江局「……」

矢島局「お梅の局なんぞに、負けてなるもの
か」

不安そうな顔の近江局。

N「近江局の予感を決して外れているとは言
えない状況となった。大奥内の三つ巴の戦
いはお梅の局が戻ったことで、主な対立は
矢島局と近江局一派と姉小路と飛鳥井一派
の二極となったが、関係の悪さは相変わら
ずだった。が、五年の歳月が流れた寛文二
年、西暦一六六二年の春、老中筆頭の松平
信綱が病没した頃より、大奥の風向きは変
わろうとしたのである」

○同・同・顫子の部屋（五年後）

顫子、姉小路、飛鳥井が菓子を食べ
て
いる。

顫子「近頃、近江局殿を見かけぬな」

姉小路「お体の具合が悪く、お屋敷にてご養
生されているとのこと」

○近江局の屋敷・全景

顫子の声「屋敷？」

○同・一室

茶を飲んで休んでいる近江局。

飛鳥井の声「どのような手を使ったのか分か
りませぬが、上様からお屋敷を賜ったそう
にございます」

○江戸城・大奥・顫子の部屋

姉小路「矢島殿の入れ知恵であろう。上様は、
矢島殿の申すことは、素直に聞き入れてし

まいます故」

飛鳥井「ほんに、矢島殿のお考えは分からぬ」

颯子「上様も何故、矢島殿や近江殿のために

そこまで……」

姉小路「ご幼少の頃より、母同然のようにお育てになったからでございましょう。血のつながりがなくとも、母と子のような間柄なのでございますから」

颯子「母と子か……」

飛鳥井「御台様……」

颯子「私が、上様のお子をお産みできる体であれば、少しは子を想う母の気持ちも分かれると言うのに……」

と、自分のお腹をさする――やりきれないように颯子を見つめる姉小路と飛鳥井。

N「颯子が子のできない体と分かってから、大奥では家綱の側室を見つける動きが始まっていた。そして三年の時を経て、ようやく側室が決まった。が、この側室の存在に

より、颯子と家綱の関係は完全に冷え切つたものとなった」

○同・同・お梅の局の部屋（三年後）

お梅の局と鶴岡が話している。

鶴岡「新しくご側室になられたお振りの方様、それはたいそうな美しさで、上様もお気に入りのことにございます」

お梅の局「御台様もお可哀想なお方じゃ。大奥に入られた間もない頃は、仲睦まじいご夫婦であつたというのに……」

鶴岡「御台様お興入れより八年。大奥とは、時に残酷な場所にございます。ご側室を設けることで、ご夫婦仲が悪くなるのでございますから」

お梅の局「げに恐ろしいところじゃ」

鶴岡「その恐ろしいところを作られた春日様が、一番恐ろしいのやもしれませぬな」

お梅の局「そなたも言うようになったの」

鶴岡「（苦笑して）これは、とんだ戯言を申

しました」

お梅の局「して、相談とは何じゃ？」

鶴岡「そうでした。実は、大老に、老中の酒井忠清様を大奥より推挙しようと思っております、お梅様のご意見を賜りたいと」

お梅の局「酒井殿か。あのお方であれば何ら申し分ないであろう。良き人選じゃ」

鶴岡「有難う存じます」

○同・表・松の廊下（一年後）

大老となった酒井が歩いている――すれ違う幕閣や役人たちが、立ち止まって一礼をしていく。

N「翌、寛文六年、西暦一六六六年の春、老中として幕府を支えてきた酒井忠清は、大老に就任した」

○同・大奥・鶴岡の部屋

花を活けている鶴岡。

N 「酒井を大老に推挙したことと、近江局が
隠居したことが重なり、鶴岡の御年寄とし
ての権勢は広がり、やがて矢島局に続く御
年寄二番手の位になった」

○同・同・矢島局の部屋

元氣のない様子で煙管を吸っている矢
島局。

N 「また、家綱の側室となったお振が懷妊の
上、病で没したことで、お振の後見であつ
た矢島局は再起のために再び側室選びに尽
力するもの上手く行かず、それが災いと
なり、実子同然に育てた家綱との仲も陰悪
となつてしまった」

○近江局の屋敷・一室（四年後）

近江局の遺体に手を合わせている酒井。
N 「寛文十年、西暦一六七〇年には、近江局
が死去。以来、矢島局は表に姿を見せるこ
となくなり、鶴岡に筆頭御年寄の職を譲つ

た後は隠居同然の生活を送り始めた」

○同・同・廊下（六年後）

お梅の局が歩いている。

N「さらに時は流れ、六年の歳月が経った延宝四年、西暦一六七六年の秋」

○同・同・顚子の部屋

打掛が衣桁にかけられている。

お梅の局、姉小路、飛鳥井が話している。

お梅の局「京にお帰りになられる……」

姉小路「御台様が亡くなられ、我らがこの大奥に残る理由もございませぬ故」

お梅の局「本理院様の三回忌もまだ済んでおらぬというのに、まさか御台様までもが、こんなに早く逝かれるとは……」

飛鳥井「お梅様には何とお礼を申し上げて良いやら。あなた様のおかげをもって、御台様や我らは、この大奥で暮らすことができ

たのでございます」

姉小路「ほんに……。有難う存じました」

お梅の局「そのような……。私は、今でも悔
いているのです。矢島殿が、上様にご側室
を薦められた折、止められなかったことを
……」

姉小路「……」

飛鳥井「……」

お梅の局「あの時、是が非でも矢島殿を止め
ていたら、上様と御台様の仲が悪くなるこ
ともなかったでしょうに……」

姉小路「もう良いのです。いくらお止めして
も、矢島殿のことです。無理にでも、ご側
室を見つけられたことでしょう」

飛鳥井「矢島殿なら、やりかねませぬな……」

お梅の局「……」

姉小路「お梅様、どうかお体を大事になされ
ませ」

飛鳥井「いつまでも、この大奥のために尽く
されますことを、お祈りいたしております」

寂しながらも、優しく頷くお梅の局。

○同・同・お梅の局の部屋（数日後）

茶を飲みながら話しているお梅の局と

鶴岡。

鶴岡「大奥もすっかり、静かになりましたな」

お梅の局「御台様が亡くなり、姉小路殿も飛

鳥井殿も去られたからの……」

鶴岡「もう、京に戻られた頃でございましたよ

うか」

お梅の局「ゆつくりと、余生を過ごされているであろう。京はこれから、紅葉が美しく

なる頃じゃ」

○京・紅葉の見える庭園

一面に美しく咲く紅葉を、歩きながら

見て回っている姉小路と飛鳥井。

○江戸城・大奥・お梅の局の部屋

鶴岡「如何でございました。大奥でも、女

中たちの日頃の憂さ晴らしに、無礼講に、
紅葉の宴をいたすというのは」

お梅の局「そういう日があっても、たまには
良いであろう。さすが鶴岡じゃ。これでも
た、大奥の空気が変わるであろう」

笑い合うお梅の局と鶴岡。

○同・表・松の廊下（三年後）

老中・堀田正俊が歩いている。

N「酒井忠清が大老に就任した同じ年に、老
中首座となったのは春日局の孫である稲葉
正則であった。その稲葉の娘婿である堀田
正俊が老中職に就いたのは、延宝七年、西
暦一九七九年のことであった」

○同・中奥・家綱の部屋（控えの間（一年後）
病に伏せて休んでいる家綱——控えの
間で談義をしている酒井と堀田。

N「亡き春日局の養子にもなっていた堀田は、
政治的発言権も強く、老中就任の翌年、将

軍家綱の病が悪化し、危篤となった折、大老の酒井と意見が真つ向から対立していた」
酒井「上様のご病状は芳しくない。早急にお世継ぎを決めねばならぬ」

堀田「いかにも」

と、お梅の局と鶴岡が入ってくる――
一礼して迎える酒井と堀田。

鶴岡「上様のご様子は？」

酒井「今は落ち着いておりますが、いつまた発作が起きますことか……」

お梅の局「左様なことになっておったか……」

堀田「お世継ぎのことを、酒井様と話しておるところでございました」

鶴岡「もはや、ご快癒の兆しは無いか……」

お梅の局「……」

鶴岡「して、お世継ぎのことにございますが、方々のお考えは？」

酒井「上様にはお子がおられぬ。鎌倉の昔の例に従い、京の有栖川宮家の幸仁親王を宮將軍になさっては如何かと」

お梅の局「親王方を、将軍に……」

鶴岡「徳川の血筋ではないお方を将軍になさ
つては、徳川の世とは言えぬのではござい
ませぬか？」

酒井「親王方ではあるが、有栖川宮家は、徳
川家及び越前松平家とは縁続きである故、
ご懸念には及ばぬ」

鶴岡「左様でございますか」

お梅の局「堀田殿のお考えは？」

堀田「徳川の血筋を重んじるのであれば、御
弟君である、舘林宰相の綱吉公を跡目とす
るのは如何かと」

お梅の局「綱吉公……。もしやお母上は……」

堀田「はい。三代将軍家光公ご側室・桂昌院
お玉の方様にございます」

お梅の局「……」

鶴岡「お玉の方……」

酒井「されど、将軍というのは、古来より将
軍継嗣が継ぐものなれば……」

堀田「（遮って）遠縁よりも、直系の者が継

がねば、徳川の家や、この幕府は盤石なものにはなりますまい」

険しい顔で睨み合う酒井と堀田。

N 「宮將軍を推した酒井であつたが、この案は堀田を筆頭に、徳川御三家の一つである水戸の光圀ら、幕府の数多の重鎮による反対を受け、世継ぎは三代將軍家光の四男であり、家綱の弟でもある綱吉と決まつた。そして、それから数日経つた延宝八年、西暦一六八〇年の五月、四代將軍家綱は、三十八歳の若さで、この世を去つた」

○同・大奥・矢島局の部屋

懐剣で自らの心臓を突き刺す矢島局。

N 「家綱の死後まもなく、乳母であつた矢島局は、後を追うように殉死した」

○同・表・大広間

幕閣一同の前で、上座に座る五代將軍・綱吉。

N「同年八月、綱吉は五代將軍として江戸城へ入城」

○同・大奥・信子の部屋

御台所・信子が、着替えをしている。

N「時を同じくして、三人の女が大奥入りをした。綱吉正室で御台所となった信子」

○同・同・お伝の部屋

娘・鶴姫、息子・徳松と一緒に遊んでいるお伝。

N「綱吉側室・お伝」

○同・同・桂昌院の部屋

茶を飲んでいる桂昌院（お玉）。

N「そして、綱吉の生母で、かつてお梅の局の部屋子として仕えていた、桂昌院お玉」

と、女中が入ってくると、

女中「申し上げます。大上臈お梅の局様、筆頭御年寄鶴岡様がお越しにございます」

桂昌院「おお、参られたか」

と、お梅の局と鶴岡が入ってくる。

お梅の局「桂昌院様におかれましては、ご機嫌麗しく、恐悦至極に存じます。この度は、網吉公將軍職ご就任、誠におめでとうございます」

桂昌院「お言葉、有難く存じます。お二人とも、変わらずお元気そうで」

鶴岡「桂昌院様も、久方ぶりに大奥にお戻りになられ、お懐かしゅうございました」

桂昌院「鶴岡殿は、御年寄になられたとか。

しかも今は筆頭。長く大奥に勤められた証にございますな」

鶴岡「私は、生涯をこの大奥に捧げる覚悟にございますれば」

桂昌院「それは良いお心がけじゃ」

鶴岡「……」

お梅の局「大奥の一切は、これなる鶴岡に任せております。桂昌院様におかれましては、ごゆるりとお暮らしあそばされませ」

桂昌院「お梅殿」

お梅の局「……」

桂昌院「私は將軍生母。となれば、大奥における実権は、私にもあるのではないか」

お梅の局「……」

桂昌院「一度、よう考えていただきたい」

面白くない顔で平伏するお梅の局と鶴岡。
岡。

○同・同・千鳥の間

深刻そうに話しているお梅の局と鶴岡。

お梅の局「何じゃ、あの言いようは……」

鶴岡「お玉の方……いえ、桂昌院様は、すっかりお人が変わってしまいましたな」

お梅の局「……」

鶴岡「お梅様の部屋子であつた頃の姿は、もう無いのですね」

お梅の局「家光公のご側室に差し出したのは、誰でもない、この私じゃ」

鶴岡「……」

お梅の局「桂昌院様にとっては、大願成就であらうな」

鶴岡「大願成就……？」

お梅の局「桂昌院様は、身籠ったお子が男児であれば、必ずや將軍にすると申されておった」

鶴岡「そのようなこともございましたな……」
お梅の局「これから、どうなることやら……」

大きな溜息をつくお梅の局と鶴岡。

N「この頃、大奥では桂昌院とお伝の一派、そして信子一派の二手に分かれた対立が顕著に表れており、お梅の局や鶴岡といった古参の女中たちは、蚊帳の外となっていた」

○同・表・黒書院（一年後）

堀田が老中たちと談義をしている。

N「また表では、酒井忠清が綱吉から病氣療養を命じられて大老職を罷免された。綱吉が將軍となつて一年が経った天和元年、西暦一六八一年の年の瀬であつた。そして酒

井の後に大老となったのは、綱吉を五代將軍に推挙した老中・堀田正俊であった」

○同・同・一室（三年後）

N「しかし、その堀田の権勢も長くは続かず……」

襖に血が吹き飛び、堀田が勢いよく襖を破って倒れ込むと、そのまま息絶える。

N「わずか三年後の貞享元年、西暦一六八四年の夏、従叔父であり、若年寄の美濃青野藩主・稲葉正休の手にかかり、江戸城内で暗殺された。義理の父・稲葉正則が隠居して、わずか一年後の出来事であった」

○同・大奥・お伝の部屋

位牌に手を合わせているお梅の局とお伝。

お梅の局「徳松君が亡くなられて、もう一年でございますか」

お伝「ええ……。お世継ぎとして、大事に育てて参りましたのに」

お梅の局「桂昌院様は、何と……？」

お伝「何も……。徳松君が亡くなってから、私の元に来ることもなくなってしまいました。今は、上様にお世継ぎができるようにと、隆光様とご祈禱を」

お梅の局「またご祈禱か……。委細は存じませぬが、桂昌院様が崇拝するほどの僧侶なのでございましょう」

お伝「はい。桂昌院様は、隆光様の申されることには必ず従われて」

お梅の局「政にまで、口を出すことにならねば良いが……」

不安な顔のお梅の局。

○同・同・仏の間

祈禱をしている僧侶・隆光——共に瞑目してお経を唱えている桂昌院。
遠くから、その様子を睨みつけるよう

に見ている信子。

信子「何とも狂うておるわ……」

と、呆れ顔で去っていく。

○同・同・信子の部屋

信子と鶴岡が話している。

鶴岡「京より、上臈御年寄をお呼びに？」

信子「わらわは、桂昌院なんぞに負けとうはないのじゃ。そなたも、力を貸してくれるな」

鶴岡「はあ……」

○同・同・仏の間

隆光と桂昌院が話している。

隆光「西の方角に、気を付けられませ」

桂昌院「西……？」

訝しい顔の桂昌院。

○同・同・廊下（数ヶ月後）

歩く女性の後ろ姿。

N「それから数ヶ月の後、教養と美貌を兼ね備えた京女が、大奥へ入城した」

○同・同・お梅の局の部屋

お梅の局と鶴岡を前に平伏している上

臈御年寄・右衛門左。

鶴岡「この度、御台所信子様より召し抱えられました、上臈御年寄の右衛門左様にございます」

右衛門左「右衛門左にございます。何卒、よろしくお願い申し上げます」

お梅の局「京では、御台様の妹君、中宮の鷹司房子様にお仕えしていたと聞いておりますが」

右衛門左「はい。この度、信子様のたつてのお望みで、大奥に勤めることとあいなりました」

お梅の局「京よりの長旅、さぞお疲れにございました。まずはゆりとお休みになられた後、お勤めに励まれませ」

右衛門左「お心遣い、かたじけのう存じます。

では、挨拶回りが済みましてから」

お梅の局「まだ回られるお方が？」

右衛門左「桂昌院様とお伝の方様に」

鶴岡「まだ、桂昌院様の元に行かれてないのですか。將軍生母であると言うのに」

右衛門左「恐れながら、桂昌院様は元を正せば、京の八百屋の娘で、お梅の局様の部屋子であつたとお聞きしております。それに、先々代家光公のご側室になつたのも、お梅の局様のご推挙があつたからこそでございます。順序で申せば、お梅の局様へのご挨拶を先に行うのが、道理というものでございまいましよう」

言葉も出ず黙つてしまふお梅の局と鶴岡。

右衛門左「では、私はこれにて」

と、平伏すると、去っていく。

鶴岡「噂通り、教養のあるお方は、なさるところが違いますな」

お梅の局「そうじゃな……」

鶴岡「今や桂昌院様は、お一人で今のお立場になったと思われておりますが、右衛門左様の仰せの通り、お梅様のお力があつてこそにございましょう。ここ数年、大奥の実権は全て桂昌院様が握っておられ、お梅様や私は、もはや飾り同然。盗人猛々しいとは、このことにございましょう」

お梅の局「鶴岡（とたしなめる）」

不服そうな顔の鶴岡。

○同・同・桂昌院の部屋

苛々しながら煙管を吸っている桂昌院。

○同・同・信子の部屋

信子と右衛門左が話している。

信子「（高らかに笑って）そうか。あの桂昌院の悔しい顔が目には浮かぶわ。この目でも見たかったものじゃ」

右衛門左「大奥の実権を握られているのは桂

昌院様にございますが、何故そのような？

お梅の局様や鶴岡様という方がいらつしや

いますのに」

信子「あの親子は狂っておるのじゃ」

右衛門左「……？」

信子「上様は桂昌院を溺愛しており、桂昌院

もまた上様を溺愛しておるのじゃ」

右衛門左「相思相愛なのでございますね」

信子「あの二人が肩を並べているところを見てみるが良い。吐き気がするわ」

右衛門左「……」

信子「八百屋の娘の部屋子あがりなんぞに、

好きにされてたまるものか」

右衛門左「私に万事お任せくださいませ」

信子「頼んだぞ、右衛門左」

右衛門左「はい」

大きく頷く右衛門左。

○同・同・一室

女中たちが集まっており、右衛門左の

講義を聞いている。

N「古典に関する深い知識を持っていた右衛門左の人気は大奥中に瞬く間に広がり、学問を教える役割を務め始めると、その講義を聞きたいという女中が後を絶たなかった」
お梅の局が通りかかると、感心そうに中の様子を見ている。

○同・同・仏の間（三年後）

祈祷をしている隆光――手を合わせている桂昌院。

N「しかしその一方で、綱吉には一向に世継ぎ誕生の影が見えず、それが三年も続いていた桂昌院は、しびれを切らしていた」

隆光、祈祷が終わると、桂昌院のほうを振り向き、

隆光「上様にお子ができぬのは、前世で生き物を殺めているからでございます」

桂昌院「何と……。隆光様、お教えてくださいませ。いかにすれば、上様にお子ができる

ようになるのでございましょうか」

隆光「生き物を、大事になされませ」

桂昌院「生き物……？」

隆光「上様の干支は？」

桂昌院「犬にございます」

隆光「なれば生き物の中でも、犬を大事になされませ。生類を憐れむのでございます」

桂昌院「生類を憐れむ……」

○江戸の街

野良犬が走っている――町民たちの困り顔。

○江戸城・中奥・綱吉の部屋

狢を撫でている綱吉。

N「貞享四年、西暦一六八七年の秋、綱吉は生類を憐れむことを趣旨とした法令を制定した。世に言う『生類憐みの令』である。

しかしこの令によって、庶民の生活に悪影響を与え、綱吉への評価は下がり、綱吉が

陰で『犬公方』と呼ばれる要因となった」

○同・表・廊下

側用人・牧野成貞が歩いている。

N「またこの時、綱吉に子どもができない原因は、もう一つあった」

○同・同・黒書院

綱吉と牧野が話している。

綱吉「成貞」

牧野「はッ」

綱吉「明後日、そなたの屋敷に参る。酒の用意を頼んだぞ」

牧野「かしこまりました」

平伏する牧野——その顔は、複雑な顔である。

○牧野成貞の屋敷・玄関（夜・二日後）

駕籠が到着し、中から綱吉が降りてくる——迎える牧野と、妻・阿久里。

○江戸城・大奥・信子の部屋

お梅の局、信子、鶴岡、右衛門左が話
している。

信子「近頃、上様はよく外に出られておるそ
うじゃが」

鶴岡「側用人牧野成貞様のお屋敷に行かれて
おります」

信子「牧野殿の？ 城だけでは飽き足りぬか」
鶴岡「それが、牧野様のお屋敷で遊ばれると
いうのは表向き。真の理由は、牧野様の奥
方・阿久里殿にお会いになるためだとか」

右衛門左「もしや……」

お梅の局「……」

右衛門左「お梅の局様ッ……」

お梅の局「この事は、私からも桂昌院様にお
話いたしました。されど、家臣ならば上様
のお申しを受け入れるのは当然のことと申
されて……」

右衛門左「人の妻を所望されるとは……」

お梅の局「奥方の阿久里殿は、元は桂昌院様付きの女中であつたとか。牧野殿が館林藩の家老であつた頃に夫婦になつたのも、桂昌院様のご命だと聞き及んでおります」

右衛門左「牧野様も阿久里殿も、上様や桂昌院様には、何も逆らえぬということにございますか……」

信子「あの親子には、呆れるばかりじゃ」

○牧野成貞の屋敷・成貞の部屋

牧野が、阿久里に土下座をしている。

牧野「頼む。上様の所望とあれば、逆らえぬのじゃ。分かつてくれ」

阿久里「これで何度目にございますか……」

牧野「……」

阿久里「上様ともあろうお方が、人の内儀を所望されるなど、そのようなことでご政道が成り立ちましょうや……」

牧野「……」

阿久里「鬼畜の所業にございますな……」

牧野「阿久里……」

阿久里「あなたの妻として上様に会おうとするからいけないのですね」

牧野「……」

阿久里「私は今から、人形になりまする」

牧野「……」

阿久里「上様に遊ばれる人形になって参りまする」

と、立ち上がり、出ていこうとする。

牧野「阿久里ッ……」

と、阿久里の手を掴む——阿久里、その手を払いどけて、出ていく。

牧野「阿久里……」

呆然と見送る牧野。

○同・一室

綱吉が待っている——阿久里が入ってくる。

綱吉「阿久里、待っておったぞ」

阿久里「……」

綱吉「さ、近う寄れ」

阿久里、綱吉の隣に座る——綱吉、阿久里の着物の帯をほどき、着物を脱がせると、隣の襖を開ける。布団が敷かれ、枕が二つ並べられている。

思わず目をそらす阿久里。

綱吉、阿久里の手を引っ張り、隣の間に入ると、襖を閉める。

阿久里の声「上様……」

綱吉の声「そなたの生まれた姿が、また見たいのじゃ」

阿久里の声「上様……」

○同・成貞の部屋

悔し涙を流している牧野——拳を握り、何度も膝に当てている。

○同・表

綱吉の乗った駕籠の一行が出発する。

○同・一室

髪と着物の乱れた阿久里が呆然と座っている――牧野が駆け込んでくる。

牧野「阿久里……」

阿久里「旦那様……」

牧野、泣きながら阿久里を抱きしめる。

N「それから、綱吉は牧野の屋敷へ足繁く出入りするようになり、その度に阿久里を所望した。綱吉が帰った後に阿久里を抱きしめ、慰めることを、牧野は夫として一度も欠かさなかった」

○江戸城・大奥・お伝の部屋

お伝と鶴岡が話している。

お伝「上様が、そのような……」

鶴岡「はい。そのことで耐えかねた御台様が
今、お梅の局様と右衛門左様と共に桂昌院
様の元へ」

お伝「左様にございますか……」

○同・同・桂昌院の部屋

桂昌院、お梅の局、信子、右衛門左が
話している。

信子「阿久里は、牧野の奥方。そのような者
に手を付けるなど、天下人のなさりようと
は思えませぬ。桂昌院様は、何とも思われ
ぬのですか」

桂昌院「上様の所望されたことを止めること
などできぬ」

信子「阿久里は、ここしばらく床に臥せる日
が多いとか。これも、上様が悪いのでござ
います。今に天罰が下りましょう」

桂昌院「黙りやッ……。上様に対して何たる
無礼な」

信子「人の道に外れたことをなさっているの
です。何を言われても、自業自得というも
の」

桂昌院「そなたは御台所であろう。言葉には
気を付けぬか。（とお梅の局に）お梅殿、
黙って聞いておるのか」

お梅の局「御台様の仰ることは、理に叶っておりますれば」

桂昌院「……」

信子「それともう一つ、お伝えいたしたい儀が」

桂昌院「何じゃ」

信子「これなる右衛門左を上様にお引き合わせしましたところ、学問好きの上様はたいそう気に入られ、大奥女中総支配を命じられました」

桂昌院「大奥女中総支配……上様が……」

右衛門左「本来ならば上臈御年寄は実権を握らぬのですが、上様のご命でございます故、お引き受けすることといたしました」

お梅の局「私や鶴岡も異論ございませぬ。我らももう若くはございませぬ故、実権は若い者に委ねようかと」

桂昌院「……」

信子「上様がお決めになられたことを止められぬと申されたのは、桂昌院様でございま

すぞ」

右衛門左「お梅の局様や鶴岡様に恐縮な思いではございますが、これより、大奥の一切は私にお任せいただきますように」

桂昌院「……」

信子「では、参ろうか」

と、出ていく信子、お梅の局、右衛門左。

桂昌院「お梅殿ッ……（と呼び止める）」

お梅の局「お玉……」

桂昌院「……！」

お梅の局「そなたは、上様のお育て方を間違えたのやもしれぬな」

と、去っていく——呆然と見送る桂昌院。

○同・表・廊下

牧野が呆然と立っている。

N「元号が貞享から元禄となった西暦一六八八年、右衛門左が大奥の実権を握り始めた

翌年であるこの年、牧野は、和泉、下総、常陸、下野の計七万三千石を増加。が、この異例の出世により、妻・阿久里を綱吉に差し出したという陰口を方々で叩かれたことが、牧野を苦しめていたのである」

○牧野成貞の屋敷・牧野の部屋（七年後）

呆然と座って、中庭の景色を見ている
牧野。

N 「そんな周囲の環境に耐えきれなかった牧野は、わずか五年後に綱吉に隠居を願い出、その二年後、養子であった牧野成春に家督を譲った」

○江戸城・大奥・廊下

お梅の局が歩いている。

N 「牧野が隠居した元禄八年、西暦一六九五
年の年の瀬のこと……」

○同・同・鶴岡の部屋

お梅の局が入ってくると、奥で倒れて
いる人影を見つける——ハツとなって
慌てて駆け寄ると、鶴岡が倒れている。

お梅の局「（鶴岡を抱えて）鶴岡ッ……、鶴
岡ッ……」

反応がない鶴岡。それでもずっと呼び
続けているお梅の——右衛門左が入っ
てくると、絶句して座り込む。

N「お梅の局が入城するよりも前から六十年
の長きに渡って大奥に勤めていた鶴岡が突
然の心臓発作で七十七歳の人生に終止符を
打った。鶴岡を失ったお梅の局の衝撃は大
きく、以来、表に顔を出す機会が減ってい
った」

○同・全景（六年後）

N「六年の歳月が流れ、元禄十四年、西暦一
七〇一年三月十四日……」

○同・大奥・お伝の部屋

お梅の局とお伝が、茶を飲みながら話している。

お梅の局「そうですか……。桂昌院様が従一位を賜ったのですか」

お伝「ご存じなかったのですか？」

お梅の局「私は、もう表から退いた身でございますから」

お伝「今年の冬で、六年ですか。鶴岡様が亡くなられて」

お梅の局「ええ……」

お伝「お梅の局様がお姿を見せなくなつてからと言うもの、右衛門左様はそれはそれは大奥のためにご尽力されております」

お梅の局「あのお方は、学がおありになる。これで大奥は安泰。私は、いつ冥土へ行つても良い」

お伝「そのような……」

お梅の局「私も今年で七十七にございます。

正式に隠居を願ひ出ようかと」

お伝「お梅の局様……」

お梅の局「私はもはや、忘れられたおなご。

見えぬものも同然なのですよ」

お伝「……」

お梅の局「上様のお父上、先々代家光公のご側室として大奥に入り、大奥を作られた春日局様とは何度も争うて。春日様がご自身の部屋子である先代家綱公のご生母宝樹院お楽の方様を差し出された故、私も同じように部屋子を差し出しました。それが、桂昌院様にございます。家光公のご側室になってから、あのお方は変わってしまった。ご側室になったからには、お世継ぎを産むと申されてましてな……。四代將軍には家綱公がなられ、私は亡き春日様のご遺言に従い、大上臈となって大奥に残り、桂昌院様は一度大奥を去られました。時の流れというものは残酷で、今や桂昌院様は將軍ご生母で、おなごとしては最高の位である従一位を賜り、私は隠居同然のただの年寄りとなりました。（と苦笑して）従一位と

なれば、もはや誰も桂昌院様に逆らえることできぬでありましょう。私の言うことなどに、耳すら貸してはくれますまい。人生、何があるか分かりませぬな」

返す言葉もなく黙ってしまうお伝。

○同・同・信子の部屋

退屈そうに扇子を広げている信子。

信子「桂昌院なんぞに、従一位か……」

と、右衛門左が駆け込んでくる。

右衛門左「失礼いたします……」

信子「何事じゃ？」

右衛門左「一大事にございます。表にて、刃

傷沙汰があつた由……」

信子「刃傷沙汰……？」

右衛門左「朝廷よりの勅使が参られる儀式を

仕切る高家筆頭の吉良様に対し、饗応役の

浅野様が、松の廊下にて斬りかかったとか」

信子「して、吉良殿のお命は？」

右衛門左「幸いお命はご無事とのことにござ

いますが、本日は桂昌院様が従一位を賜る日なれば、上様はたいそうご立腹で……」

信子「無理もないであろう」

右衛門左「浅野様には、即日切腹、領地没収とのご沙汰が……」

信子「即日切腹……？ 吉良様には、お咎め無しなのか？」

右衛門左「刀を抜かなったのは殿中であることをわきまえたうえでの行いであると、御典医までお呼びして養生せよと、上様が」

信子「（呆れて）何と……」

右衛門左「御老中方も、喧嘩両成敗とは言えぬとのご意見で」

信子「上様が上様なら、老中も老中じゃな」

難しい顔のままの右衛門左。

N「この刃傷事件が、世に言う忠臣蔵の発端である。一年と九ヶ月の後、浪々の身となった赤穂浪士たちが吉良の屋敷へ討ち入り、吉良の首級をあげたことで、事件は幕を下ろすことになった。が、討ち入りの後、赤

穂浪士に切腹の沙汰を下した綱吉をめぐって、この二人の意見が分かれていた」

○同・同・桂昌院の部屋（二年後）

お梅の局と桂昌院が話している。

桂昌院「ではお梅殿は、上様のご沙汰に異論があるかと申されるのか？」

お梅の局「刃傷沙汰の折の浅野様の切腹、浅野家の領地没収、そして討ち入りによるお預けや遠島、赤穂の者たちの切腹……誰一人幸せになった者はおりませぬ」

桂昌院「されど、浅野家も吉良家も、世を騒がせた。処分されるのは当然のこと」

お梅の局「このようなこと申し上げたくもありませんでしたか……」

桂昌院「……？」

お梅の局「『生類憐みの令』をお定めになった上様が、一番命を軽々しくされているではございませぬか？」

桂昌院「（憤然と）そのような言われよう……」

…。お梅殿も、おつむが弱うなられたか」

お梅の局「お世継ぎご誕生のために定められたお触れとは申せ、今となつては、もはや上様にお世継ぎの望みはございませぬ」

桂昌院「……」

お梅の局「徳松君亡き後、上様にはお二人のご側室を設けられましたが、お世継ぎご誕生の兆しはもう無く、上様には諦めていただくよりほかございますまい」

桂昌院「政を司るのは上様。お梅殿にそのようなことを言われる覚えはござらぬ。それに、命を軽んじておると申されたが、政に犠牲はつきものじゃ」

お梅の局「とは申せ、人の命に変わりはございませぬ。此度の件で幾人もの命が散ったことか。ご政道のために命を犠牲にするとあつては、何のための『生類憐みの令』にございますか。天下人なれば、ましてや自ら生類を憐れむお触れをお定めになられたのであれば、これ以上命を軽々しゅう扱う

ようなことは慎まれるように、上様にお伝えくださいませ。あなた様は、上様のご生母なのでございますから」

桂昌院「……」

お梅の局「將軍の母ならば、世の恥にならぬように我が息子に進言するのじゃ、良いな」

桂昌院「従一位の私に、そのような口を聞かれるとは……。お梅殿、立場をわきまえよ」

お梅の局「そのようなことで、私がひれ伏すと思うたか」

桂昌院「……」

お梅の局「そなたを亡き家光公に差し出したのはこの私。家光公も春日局様も、今のご政道を草葉の陰から泣いて見ておられるであろうな」

桂昌院「……」

お梅の局「私も年が明ければ八十になります。そなた一人に何を言われたとて、もう怖いことはないわ」

桂昌院「……」

平伏し、去っていくお梅の局――恨め
しそうに見送る桂昌院。

N「お梅の局と桂昌院の決別は確かなもの
なってしまった。翌年、桂昌院が七十九歳
で没したことで、二人のわだかまりが消え
ることは、ついになかったのである」

○同・同・豊原の部屋

上臈御年寄・豊原が、位牌に手を合わ
せている。

N「桂昌院の死去から一年経った、宝永三年、
西暦一七〇六年、後を追うように右衛門左
も病没。遺言に従い、右衛門左の後上臈御
年寄の筆頭となった豊原が、大奥における
実権を引き継いだ」

○同・同・中庭

杖をついたお梅の局と、豊原が歩きな
がら話している。

お梅の局「大奥も、すっかり静かになってし

まわれたな」

豊原「左様にございますな」

お梅の局「桂昌院様も右衛門左殿も亡くなり、御台様やお伝の方様も、お部屋に籠もる日が増えておると聞く」

豊原「方々がお褥すべりを幾年も前になされてから、上様が太奥に来られることも少なくなり、我らは何のために太奥にいるのでしょうか」

お梅の局「この太奥は、上様のお世継ぎを設けるために、亡き春日局様がお作りになられたところ。私は子ができぬ毒を飲まされ、先々代家光公のお子をお産みすることはできなかつたが、他のご側室方はお世継ぎ争いをされておった。それだけではない。太奥における権力争いも絶えなかつた。ご正室、ご側室、御年寄、上臈……様々な立場や役職にいるおなごたちが、日々骨肉の争いというものを繰り広げ、そこで生まれる大きな渦に、いつの間にか私も巻き込まれ

ておった。私も、気がつけば争いを起こしていたのじゃ。この大奥の中で、私は敵にもなれば味方にもなった。そのような暮らしが続くと、私は何のために大奥で生きているのか分からなくなるのじゃ。それに、今のうちにひっそりとなった大奥を見ると、春日様もお嘆きになるであろうし、私もこのままで良いものかと思うてしまう」

豊原「上様は、家宣と名を改めた甲府宰相の綱豊様をお世継ぎにと決められました。もはや、新たにご側室を設けることもないのです。何気ない、静かな毎日が続くことになりましょう」

お梅の局「大奥がずっと、こんな穏やかであれば良いのに……」

豊原「左様にございますな……。お梅様が大奥を束ねられた頃は、さぞご苦勞なことが続いておりますのではございませぬか？」

お梅の局「（苦笑して）確かに、氣苦勞の絶えぬ日々を過ごしておったやもしれぬ」

豊原「……」

お梅の局「『明暦の大火』の後、一年ほど大奥を離れ、静養したこともあった。じゃが、その間に御年寄の一人であつた竹川殿が病を患つて大奥を去つた故、無性に大奥のことが気がかりになつて、戻つてきた」

豊原「……」

お梅の局「あの頃は、先代家綱公の乳母と御年寄派、御台様付きの上臈御年寄派、そして古参の御年寄派という三つ巴の争いであつたわ」

豊原「そのようなことが……」

お梅の局「家綱公が身罷られ、綱吉公の天下となつた後の大奥は、そなたの存じておるやもしれぬが、桂昌院様が大奥を束ねるようになつてしもうた」

豊原「亡き右衛門左様も、桂昌院様には手を焼いたと嘆いておられました」

お梅の局「負けじと御台様も、桂昌院様にはつきり意見を申されて、嫁姑の仲は最後まで

で陰悪であつた」

豊原「……」

お梅の局「家宣公が將軍になられた後は、またお世継ぎ争いが起こるであらうな」

豊原「家宣公にはご正室の他に、三名のご側室を設けられておると伺っております」

お梅の局「三名か……。誰がお世継ぎをお産みになり、將軍生母となるのであらうな」

豊原「この大奥における運命は、いささか妙なことにございますれば、誰一人として、知る由はございますまい。私とて、こんなにも早く右衛門左様を見送り、大奥の実権を握ることになるなど、思いもかけぬことでございます」

お梅の局「大奥とは、人の人生を狂わせる恐ろしき場所……伏魔殿というものであらうな」

豊原「そのようなところで生きている私たちもまた、恐ろしきおなごなのでございまいやうな……」

と、少し遠くのほうで、寂しそうな顔を
をした綱吉が、池の鯉に餌を与えてい
るのが見える。

お梅の局「大奥のおなごたちに振り回され、
一番お可哀想なのは、上様なのやもしれぬ」

豊原「……」

お梅の局「天下人となって、世の上に立つこ
とが、必ず幸せとは限らぬであろう」

と、ゆっくり去っていく——後に従っ
ていく豊原。

○同・同・お梅の局の部屋（五年後）

布団の中で死に化粧が施されたお梅の
局——涙を堪えながら平伏する豊原。
安らかな死に顔のお梅の局。

N「正徳元年、西暦一七一一年の晩秋、お梅
の局は八十八歳の波乱の生涯を閉じた。右
衛門左の死去から五年、綱吉と御台所信子
が相次いで死去し、家宣が六代将軍となっ
てわずか二年後のことであつた。三代将軍

家光に見染められ、側室お万の方として十六歳の時に大奥に入り、子の産めない体となった後、春日局との対立や宝樹院お楽との関係、春日局や家光の死後お梅の局と名を改め実権を握り、竹川や鶴岡と共に大奥を守ってきた時代、明暦の大火による赤澤の壮絶な最期、小石川無量院での本理院孝子との養生、矢島局や近江局との大奥での激しい権力争い、そして桂昌院お玉との決別……徳川三代ものの時代を生き抜いてきたお梅の局の人生は、決して平坦なものではなかった。が、お梅の死に顔は、全てを受け入れた、安らかな死に顔であった。人生の全てを捧げてきた徳川の世は、この後九代に渡って続き、十五代將軍慶喜が大政奉還を行った慶応三年、西暦一八六七年は、お梅の局の死から百五十六年も経った先のことである」

完